

第6節 支群F

(1) 支群Fの概要

1. 支群Fの概要 (第94図)

支群Fは、古墳群内の南寄りの位置にある。この南側及び東側は、谷田川から南西方向に伸びる開析谷、そこからさらに西側へ伸びる支谷により、東側及び南側の丘陵と画されている。支群Fの南西側で標高252.0mを測り、正直古墳群で最高所となる。丘陵平坦面が北東方向に緩やかに伸び、その東端に支群Fは位置し、東から21号墳・43号墳・20号墳とされた古墳により構成される。この東向きの斜面では、北側と南側はそれぞれ等高線が西に入り込んでいる。そして、さらに西側は、20・43号墳とみられる高まりを除けば、等高線の間隔がかなり広く、ほぼ平坦な地形であることが読み取れる。以上のことから、21号墳は幅の広い東西方向の台地の東側先端辺りに築造された古墳であることが分かる。

1964(昭和39)年の『福島県史』刊行時、21号墳は直径36m・高さ2.7mの円墳と認識され、その西側に20号墳が確認されるのみであった。そして1996(平成8)年に43号墳が認識された。

21号墳は、方墳ではないかとの指摘もあったが、2017(平成29)・2018(平成30)年の調査により円墳であることが確実となった。調査の契機となったのは、2016(平成28)年の開発行為に伴う墳丘の削平である。測量調査及び墳丘各所に設定したトレーナー調査により墳端を確認し、墳形・規模を確定するとともに、墳頂削平部で埋葬施設の状態を確認した。21号墳の西側に位置する20・43号墳については、周辺部分の測量調査を行ったのみで、詳細は知り得ない。

2. 正直20号墳 (第94・95図)

20号墳は、21号墳から続く台地の平坦面に位置し、21号墳とは40mほど離れている。現況では、墳丘南西端に北東一南西方向に伸びる土手状の高まりが取り付いているが、ここを除くと墳丘北側から東側を経て南側に至る等高線が直線的に回り込んでいる。墳丘は、現況観察によれば東西方向にやや長い形状であるが、直径約10mの円墳と考えられる。墳頂は東に寄り、東西約3.3×南北約2.1mの範囲で平坦面が確認できるが、高さが最大で1.1m前後であることから、上面を削られた可能性がある。現地形からは、周溝の有無は確認できない。

3. 正直43号墳 (第94・95図)

43号墳は、21号墳から西に約10m離れた台地平坦面に築造されている。現況では古墳と考えられるわずかな高まりが残るのみである。墳形は円墳とみられる。墳丘規模は直径約15mである。

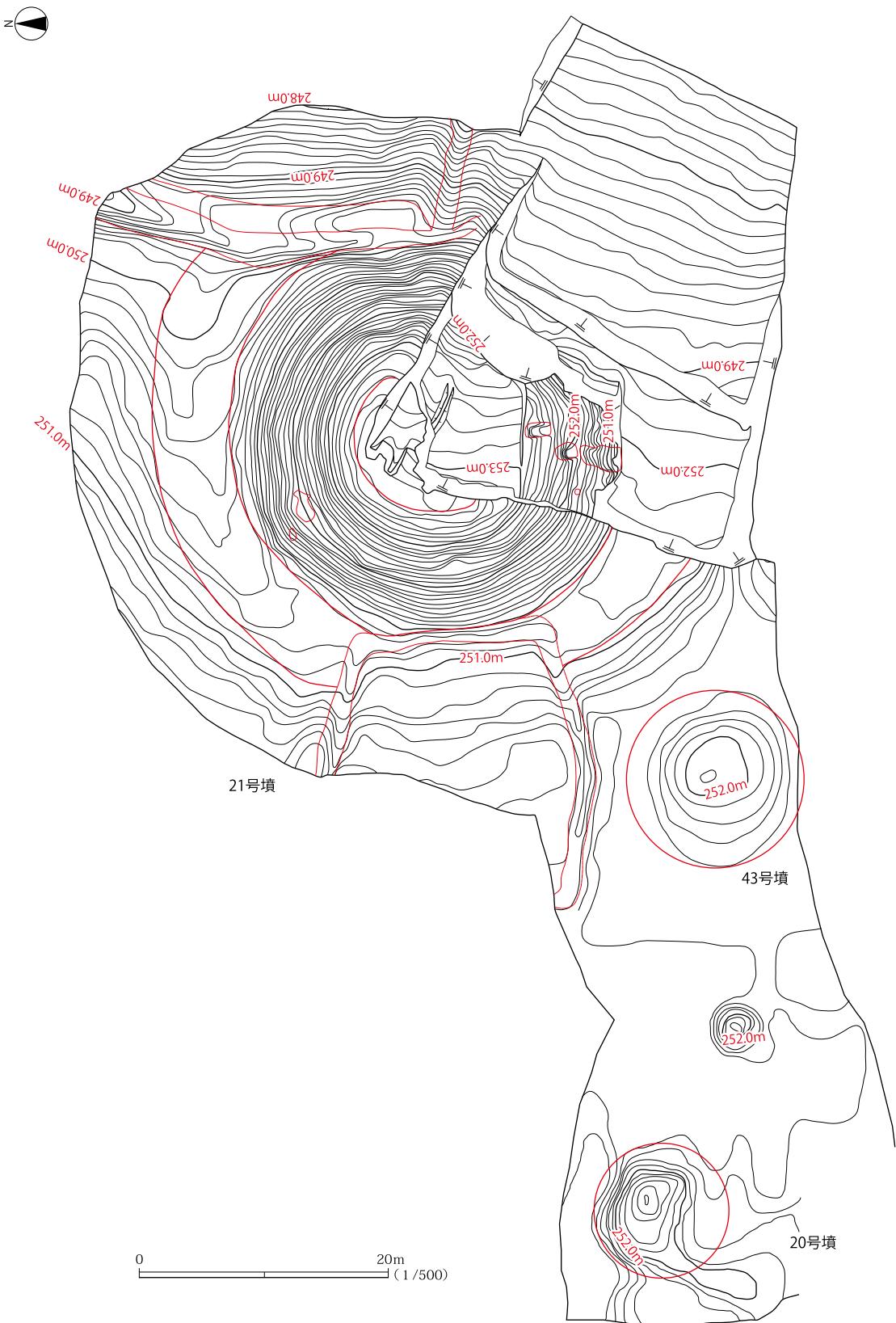
(2) 正直21号墳の調査

1. 測量調査 (第96図)

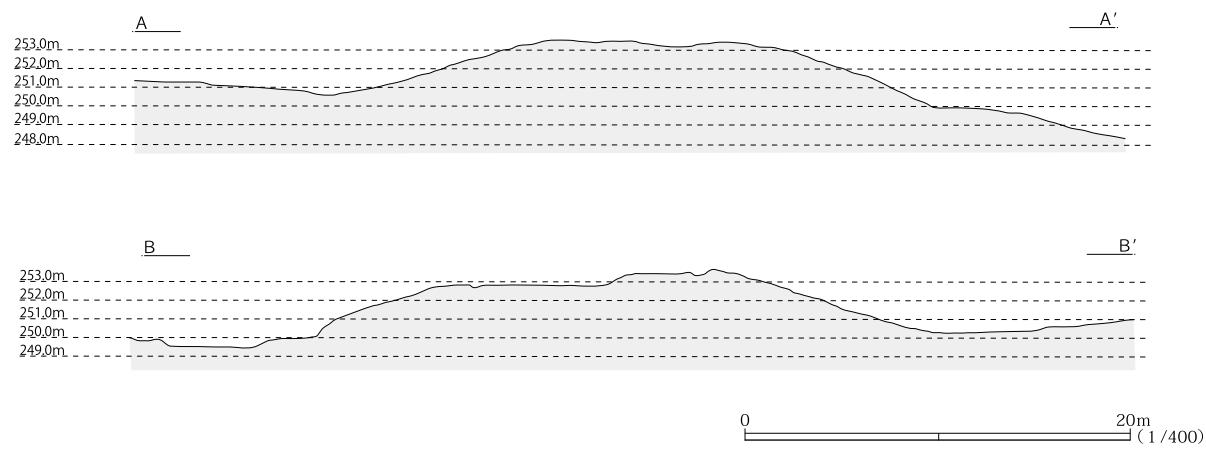
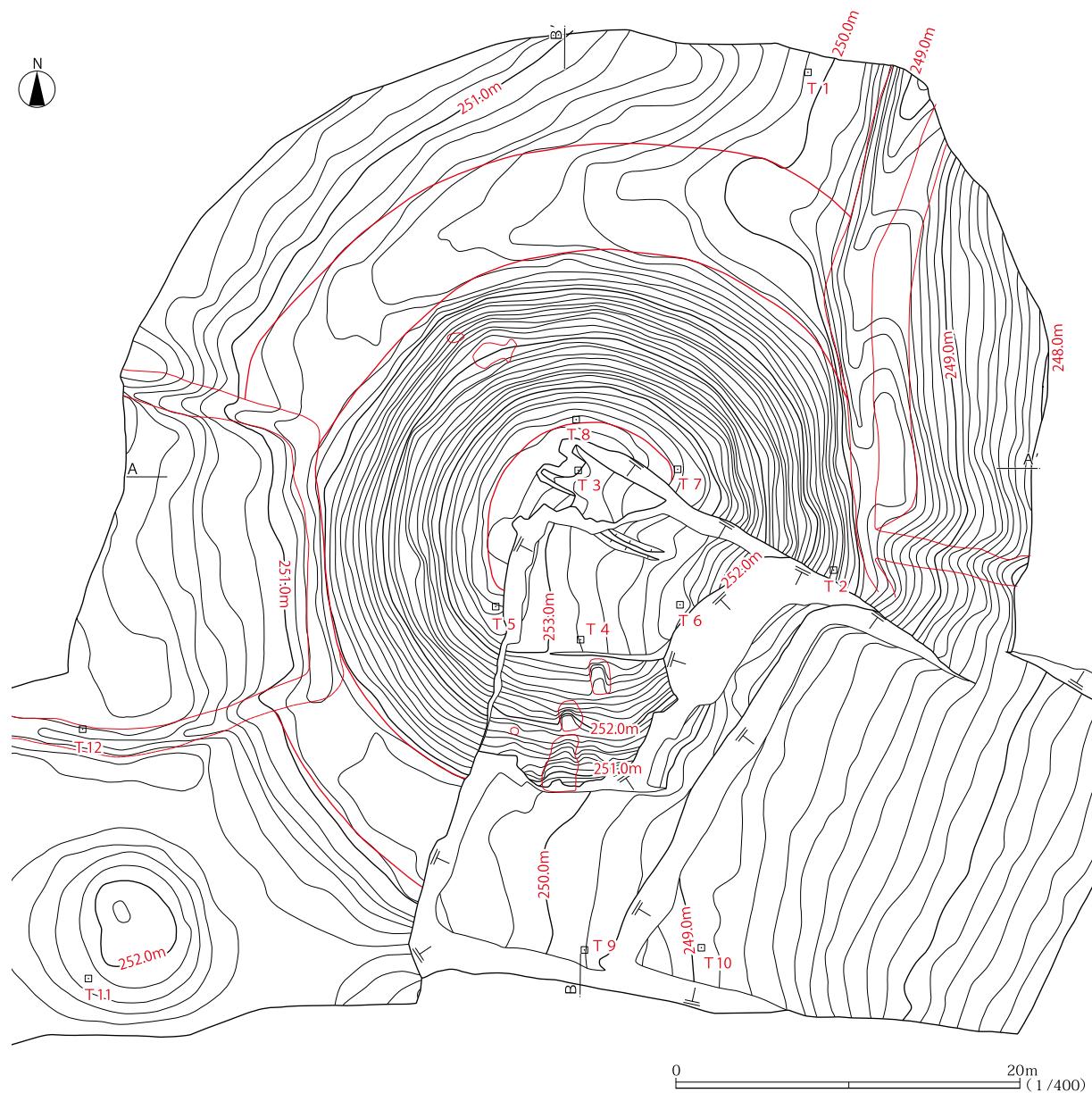
墳丘は開発行為により、南東から南にかけて1/4程度が削平を受けているが、その度合いは場所によって異なる。最も削平が著しい南東側は、中腹から下が垂直に近い状態で最大高低差2m前後削られている。ここでは墳丘が欠失し、地山面が露出していた。墳丘南側は、墳裾付近が垂直に近い状態で削られている。南側の削平部で検出された周溝の内端との間に、2~3mの平坦面が存在することから、本来の墳端付近が完全に削



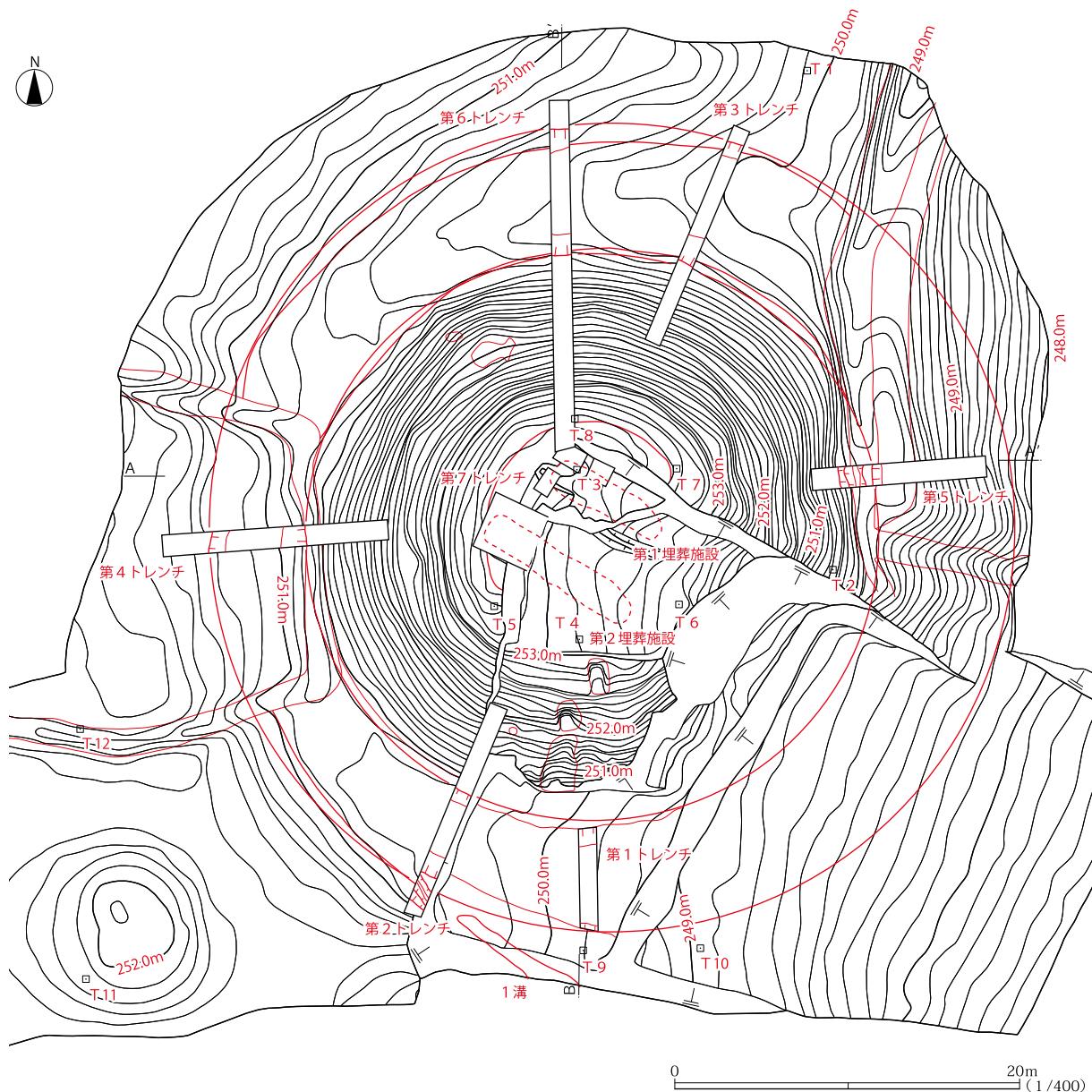
第94図 支群F測量図



第95図 20・21・43号墳測量図



第96図 21号墳測量図



第97図 21号トレンチ配置図

平されたことが分かる。中腹から墳裾近くまでは3か所の攢乱坑が見られるものの、西から回り込む等高線のそれが少ないとから、現表土が削られた程度と思われる。

墳頂周辺は、中腹にかけて東に緩く傾斜しながら平坦に削られている。上から見ると逆台形状で、その範囲は東西方向で10~15m・南北方向で8~13mにわたっている。削平の深さは、西側の現表土に接する部分で約10~30cm、北側のそれは約12~50cmである。この削平により、墳頂平坦面はほとんどが失われたとみられ、西側と北側の範囲のみがわずかに確認できた。なお、墳頂の最高標高は、西側に残る平坦面の南寄りで約253.8mである。

墳丘の北~西~南西にかけては、等高線がほぼ等間隔で円弧状に回っている。北西と西の中腹にわずかに等高線の間隔が広がるところが見られるが、これらはテラスとは考え難い。北西のそれは横穴が大きく開いており、キツネやタヌキといった獣が巣穴を掘るために搔き出した土が溜まったものである。東側の裾には、南北方向に伸びて北側が調査区外へ抜ける道の跡が存在しており、これを造成するために墳丘を削った可能性がある。

墳丘北側では、墳裾に沿うように250.0~250.7mの等高線が東から西に向かってU字状に入り込み、この部分が窪地状の地形であることが分かる。また、墳丘南西側でも同じような地形が観察され、これらの部分が周溝の範囲と考えられた。

墳丘西側には、墳裾を南北方向に約15m伸びてコの字状に西に折れる溝状の落ち込みが見られる。この落ち込みに南北を挟まれた部分は、墳裾に向かって緩く傾斜しているが、窪地状の地形は確認できない。北と南には周溝と考えられる窪地状の地形が確認できることから、この辺りのみ周溝が途切れる可能性がある。また、東側については、墳裾を南北に伸びる道跡により北側の窪地状の地形が途切れ、道跡東側の斜面の等高線にも顕著な変化が認められないことから、周溝の有無は推測できなかった。ただ、南側の削平部断面に比較的幅の広い落ち込みが確認できることや、墳丘南側削平部で検出された周溝の東端が北東に向いていることを考慮すると、東側にも周溝が回る可能性が高い。確認できた周溝幅は、現表土面で50~70cmである。

上記のような墳丘・周溝の状況から、段築のない円墳であることが分かる。

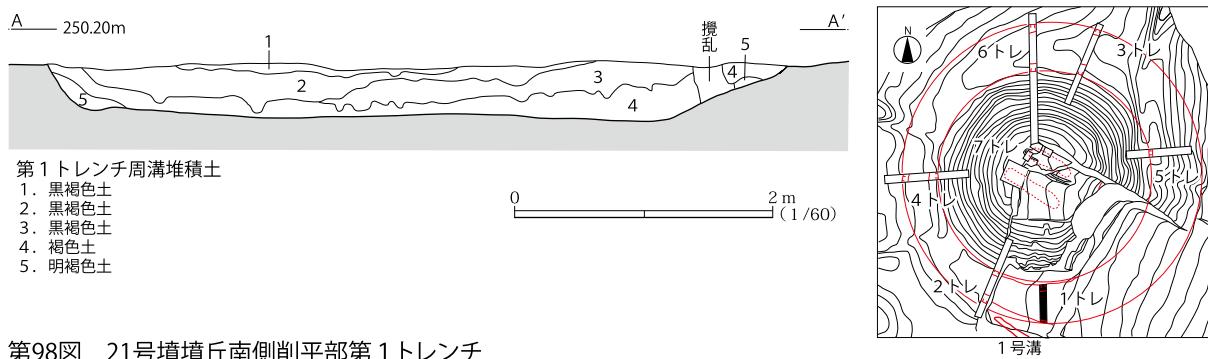
2. 墳丘南側削平部・第1トレンチ（第98図、図版47）

墳丘の南側で、東西11~13m・南北11~14mの範囲にわたって削平された部分である。削平の深さは、北西法面で0.9m前後、南西法面で1.5m前後、南東法面で0.6m前後を測る。ここでは、流出土や汚れた土を除去し、黄褐色の地山面で周溝と1号溝を検出した。また、周溝については、詳細を確認するため第1トレンチを設定して掘り込みを行った。

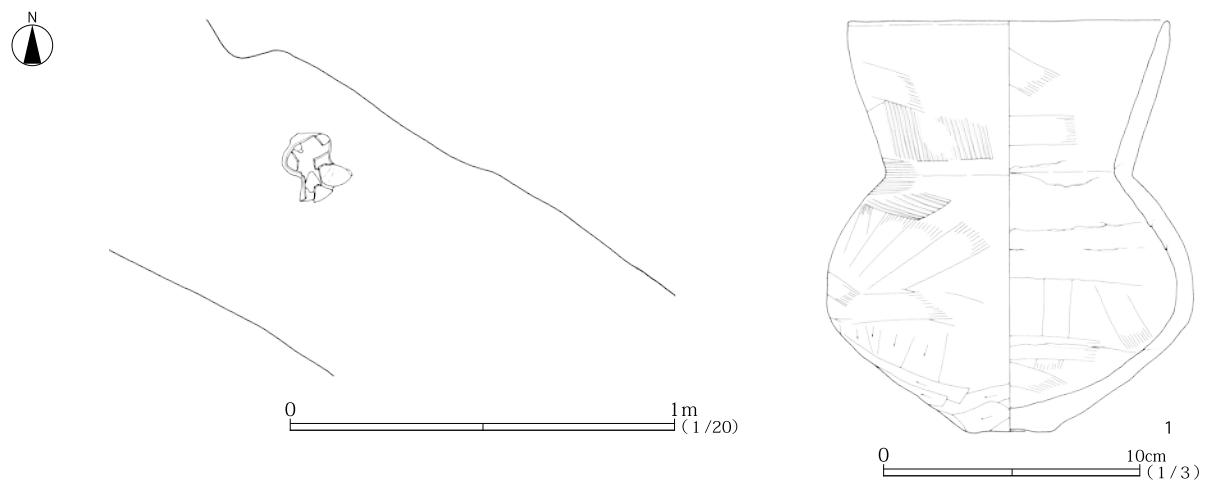
周溝は、外側が直線的で、内側はやや曲折しながら弧状に回っている。西端から4m前後まではほぼ等しい幅で、東側は徐々に広がっている。西端約4.5m・中央約5.2m・東端約6.5mの幅で、東寄りの第1トレンチを掘り下げるとき、40cm前後の深さで底面に達した。検出面からの深さは内側約45cm・中央付近約39cm・外側約35cmで、底面のレベルは内側が最も低い。周溝の堆積土は5層に区分でき、これらはレンズ状の堆積状況であることから、自然堆積と思われる。底面は、外端側が若干窪むがほぼ平坦である。

3. 1号溝（第99図、図版47）

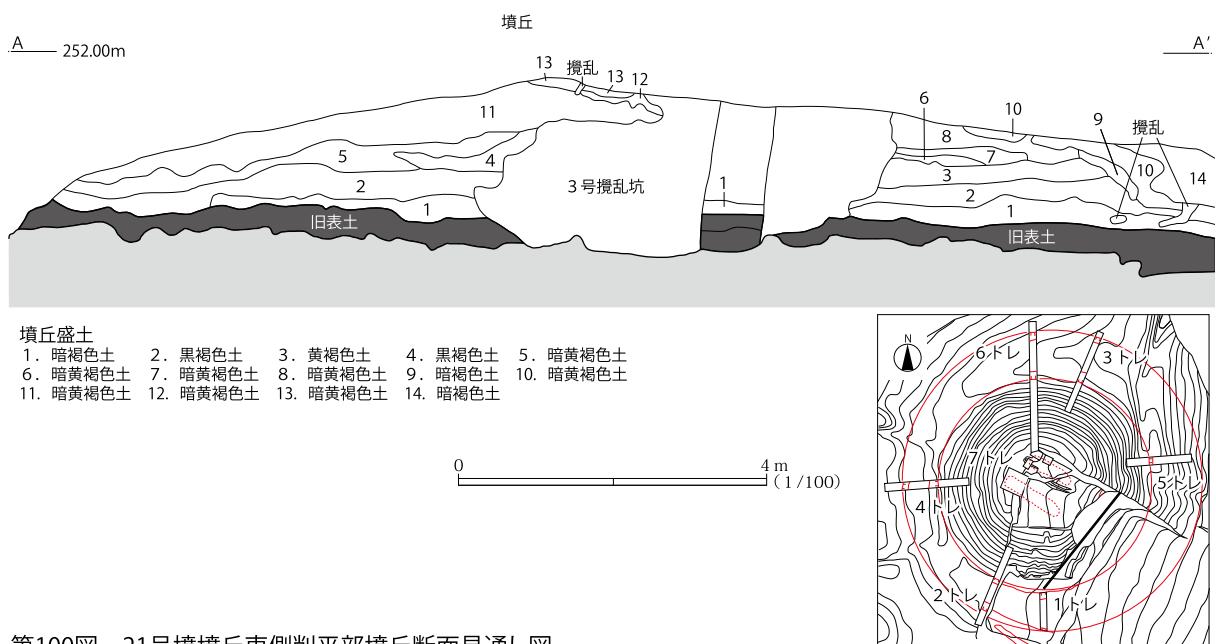
1号溝は周溝の南側で検出した。東西方向に伸びる溝で、東側は南側法面を斜行して調査区外へ抜け、西側は削平のため調査区内で途切れている。検出できた長さは、法面部分を含めて約7.1m、幅は52~113cmであ



第98図 21号墳墳丘南側削平部第1トレンチ



第99図 21号墳墳丘南側削平部1号溝および出土土器



第100図 21号墳墳丘東側削平部墳丘断面見通し図

る。検出面から、壺が出土している（第99図1）。上げ底気味の小さな底部から算盤玉のような胴部に至り、口縁部が外傾する器形である。器高16.3cm、口縁部径12.8cm、体部最大径14.7cmである。

4. 墳丘東側削平部（第100図、図版45）

東向き斜面を含む墳丘の南東側で、最も削平が著しい部分である。墳丘中腹から下はすでに失われており、これに続く東向き斜面も切土と盛土によりほぼ平坦な地形に改変されている。削平の深さは、墳丘中腹下で2m前後、東向き斜面の基部で1.2m前後である。

削平により露出した墳丘断面で、堆積土の観察を行った。東断面では、3号攢乱坑により二分されていたが、黒褐色の旧表土が標高249.5～250.0mに、20～50cmの厚みでほぼ水平に堆積しており、盛土はこの上に行われている。現況では、1m前後の高さまでは黄褐色系の土と黒褐色系の土を交互に重ね、その上に黄褐色土を主体とする土を積んだ様子がうかがえる。

5. 墳丘削平部出土土器（第101図、図版48）

削平を受けた古墳の南東側では、古墳築造時の資料と考えられる壺の破片などが出土している。

第101図1～17は壺と考えらえる資料である。5～9は口縁部から頸部及びそれに貼り付く突帶部資料と思われる。5・7はわずかに本体部分が残っている。6・8は本体から剥離しており、9は外面に横方向の剥離痕が見られる。10・11は体部破片で、ともに縦方向のナデが観察される。12～17は底部資料で、いずれも粘土紐を輪状にして、当初から底部を開いた状態で製作した開口底部の資料である。いずれもナデやユビオサエが施され、外底面には丸棒状の圧痕が見られる。13の復原底径は18.2cm、14の復原底径は16.0cmである。

18・19は棒状浮文を有する壺口縁部片である。ともに外面に貼り付け前に施されたハケメが見られる。20は鉢と思われる体部片で、外面にはハケメとミガキ、内面にはミガキが施されている。21は坏口縁部片で、外面はハケメの後ミガキとナデが施され、内面にはハケメが観察される。22・23は壺の口縁部片で、体部外面はそれぞれ縦位のハケメ・ケズリが見られる。24は壺の底部で体部下端にケズリ調整を受ける。

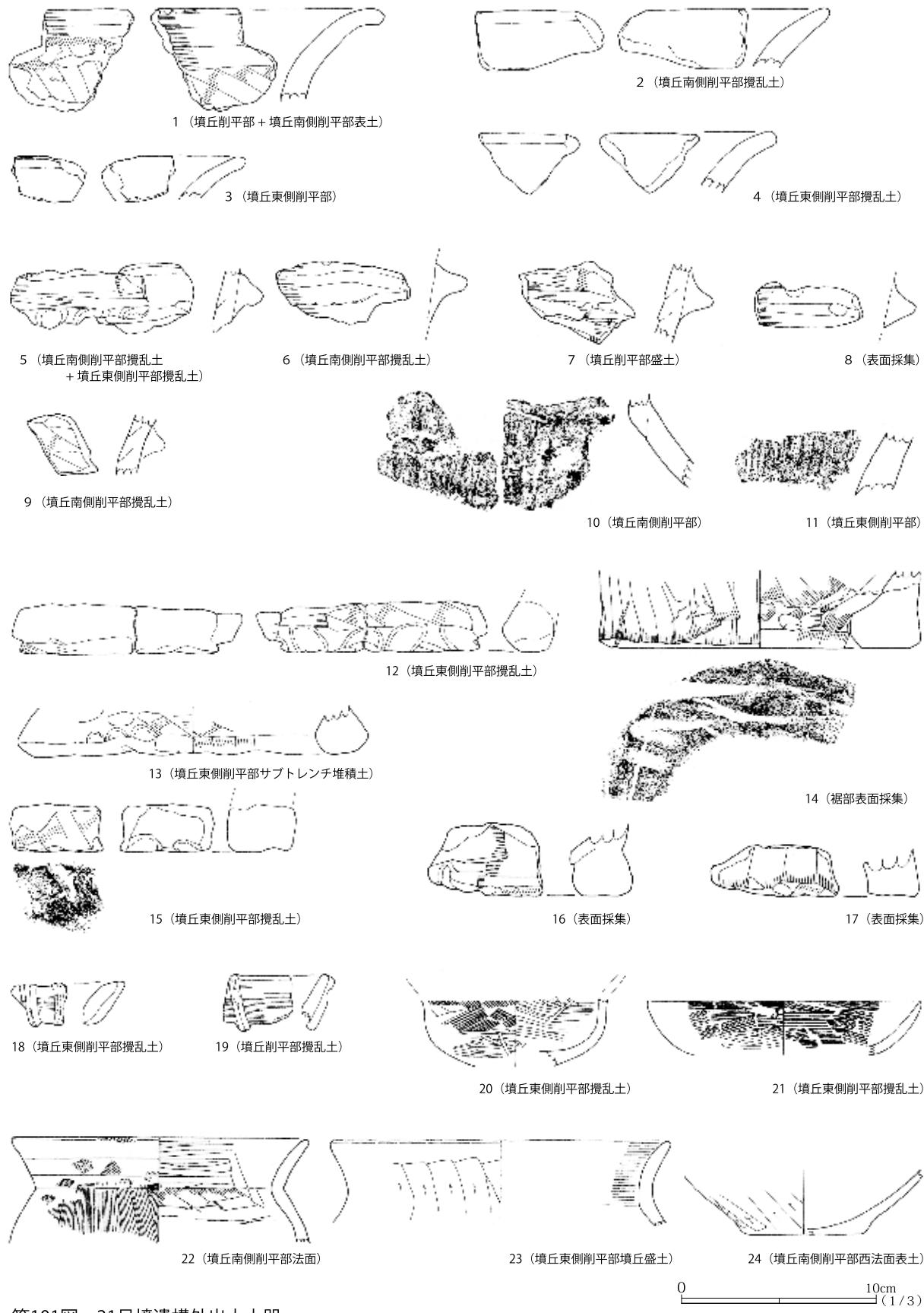
（3）周溝・墳丘下部

墳丘下部の構築状況や周溝の範囲・掘削状況などを確認し、周溝を含めた詳細な規模を明らかにするため5本のトレンチを設定した。この内、第2・3・6トレンチは、現況測量図で墳裾の形状が整い、これに連続する周溝と思われる窪地状の地形もよく表れている墳丘の南西側・北東側・北側に設定した。また、第4・5トレンチは、ともに現況測量図で墳裾の等高線に乱れがあり、これに続く周溝の痕跡も不明瞭な墳丘の西側と東側に設定した。

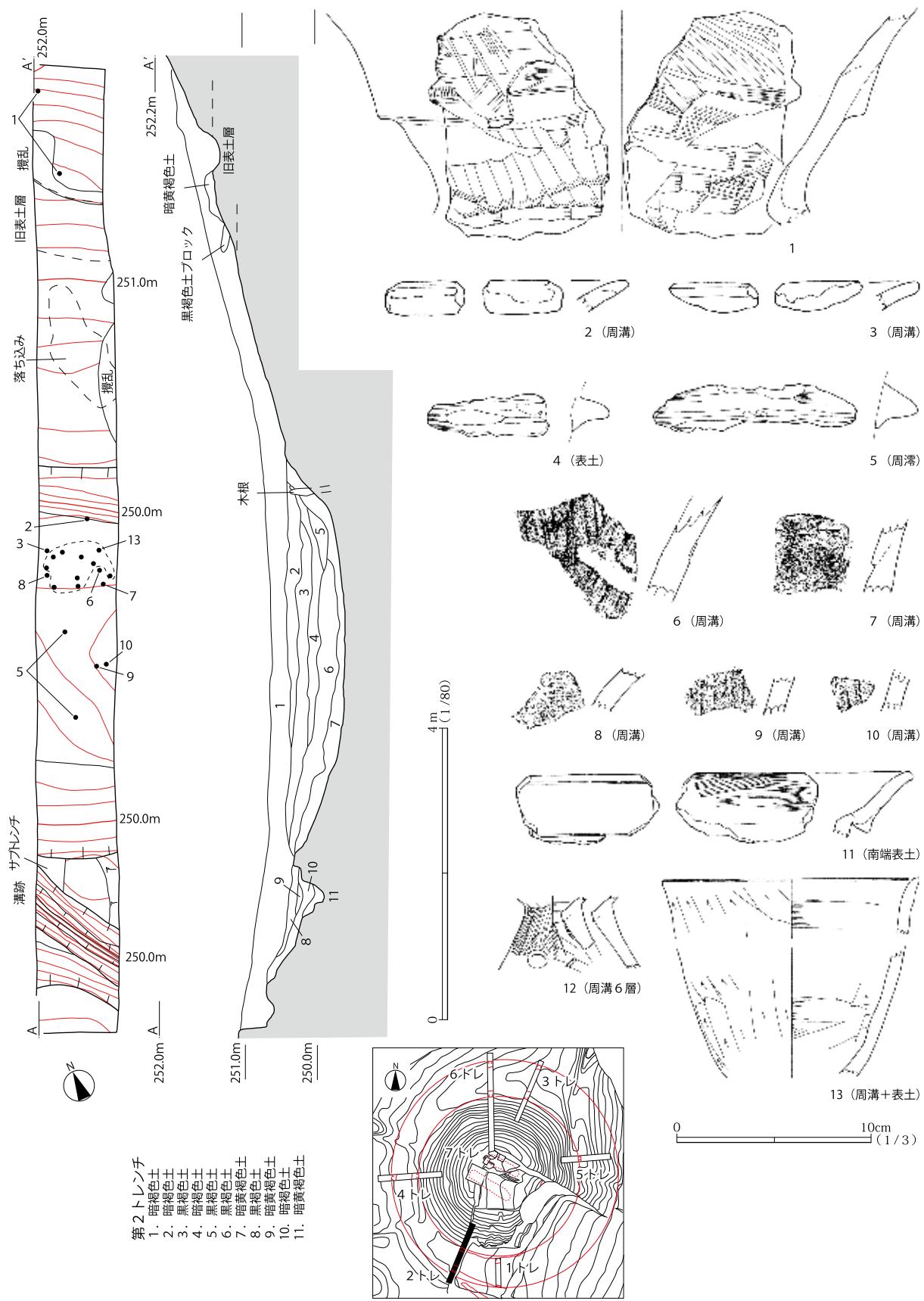
1. 南西側・第2トレンチ（第102図、図版46・48）

第2トレンチは、墳丘の南西側に設定した幅約1.1m、長さ約13.5mの南北方向トレンチである。墳丘南側削平部の西端法面に接するように設定した。その結果、墳丘面とこれに連続する周溝を確認し、南端付近では周溝の南側で溝を検出した。墳丘側の上端と墳端にあたる下端の傾斜変換線は比較的明瞭であるが、外側のそれはやや不明瞭である。下端から上端への立ち上がりは、墳丘側がかなり急峻である。

底面は、南北方向がおおむね平坦で、東西方向では東に向かって緩く傾斜している。底面の標高は249.5mから249.8mの間にある。幅は上端約5.5m、下端約3.5mで、深さは検出面から約0.8m、表土上面からは約1.0mである。



第101図 21号墳遺構外出土土器



第102図 第2トレンチ平面図・断面図・出土土器

周溝の堆積土は2層から7層にあたり、レンズ状の堆積状況であることから自然堆積と思われる。2層から6層にかけてはパミスが含まれており、特に4・6層ではその量が多い。

墳丘面は、急峻な周溝部分を除いて緩い傾斜で墳頂へ続いている。トレンチ北端の南約1.85mから約2.67mの範囲に、帯状に廻る黒褐色の旧表土層を検出した。この層の上端の標高は251.3m前後である。盛土部分は断ち割り調査を行っていないので詳細は不明であるが、表面は互層状の積み上げは見られず、ややすくすんだ黄褐色土で覆われていた。

周溝の南側で検出した溝は、北西一南東に伸びている。幅は東壁際で約0.97m、西壁際で約1.35mを測り、北西に向かって広がっている。深さは検出面から約0.58mで、断面形は漏斗状である。堆積土は8層から11層にあたり、8層にはパミスが少量含まれていたが、周溝堆積土のように多量に含まれる層は確認できなかつた。

第102図1～10は、古墳に伴う壺形埴輪と推定される破片資料である。1は墳丘面からやや浮いて出土した。二重口縁壺の口辺から頸部にかけての資料で、頸部から上はほぼ外傾する。段部は、粘土紐を張り付けて断面三角形状をしている。段部が剥離した部分をみると横線が1本引かれており、あらかじめ張り付ける位置を決めていたことが分かる。外面は段から上が横方向のナデとミガキ、下が縦方向のナデ、内面は口辺部にミガキ、頸部はハケメの後、横方向のナデが施されている。復元頸部径19.3cm、残存高11.5cmである。2・3はラッパ状に開く口縁部片である。4・5は口縁部～頸部あたりから剥離した突帶部分の資料である。外面はともに横方向のナデが残る。6・7・9・10は頸部近くの破片で、6・9・10は外面に縦方向のナデが見られる。7は外面に帶状の剥離痕が見られる。8は口縁部あたりの破片である。7・8・10には僅かに赤彩痕が観察される。11はトレンチ南端の表土から出土した二重口縁壺の破片で、内面にハケメが見られる。12は、円形の透かし孔が僅かに残る器台の脚部片である。外面はミガキ、内面にはナデが見られる。13は小型の鉢で、胴部外面にヘラケズリの調整を受ける。復元口径13.6cm、復元器高10.5cmを測る。

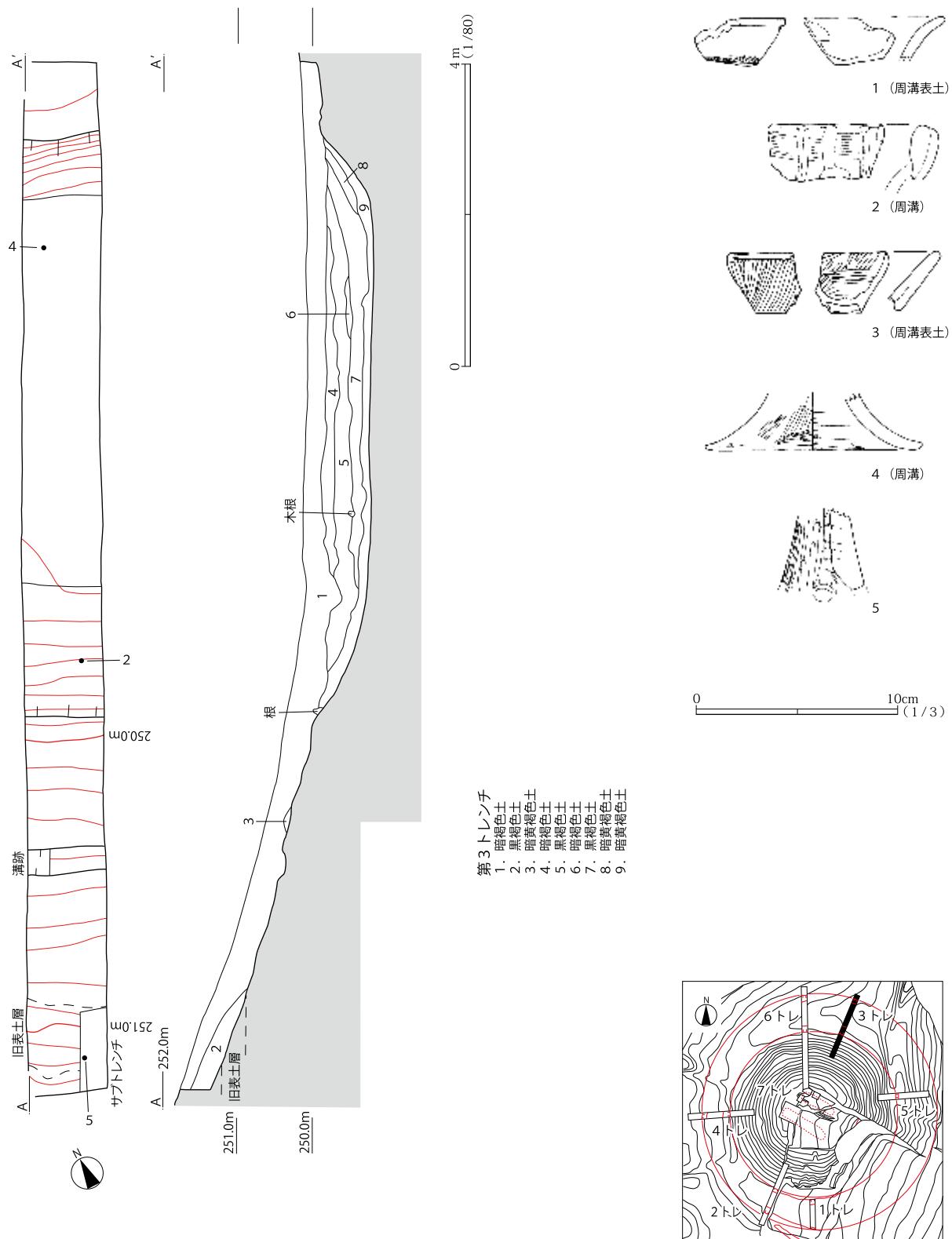
2. 北東側・第3トレンチ（第103図、図版46・48）

第3トレンチは、第2トレンチの延長線上、墳丘の北東側に設定した幅約1.0m、長さ約13.8mの南北方向トレンチである。ここでは、表土と南端付近の表土下に堆積する黒褐色土を掘り下げ、約28～45cmの深さで墳丘面とこれに続く周溝を検出した。

周溝は、第2トレンチと同様に、地山層の黄褐色ロームと黄褐色砂質ロームを掘り抜き、黄褐色砂礫土まで達している。墳丘側の上端と墳端にあたる下端の傾斜変換線はともに明瞭で、外側のそれも同様である。下端から上端への立ち上がりは、外側がやや急峻である。底面は凹凸がなく、標高249.2mのレベルでほぼ平坦に仕上げられている。幅は上端約7.2m、下端約5.2mで、深さは検出面から約0.6m、表土上面からは約0.9mである。

周溝の堆積土は4層から9層にあたる。これらは、レンズ状の堆積状況であることから自然堆積と思われる。4層から7層にかけてはパミスが含まれており、特に6・7層ではその量が多い。周溝上端から南約1.75mのところで東西に伸びる溝跡を検出したが、この溝跡は墳丘面を覆う表土が堆積していることから、墳丘構築時のものではないと判断される。

トレンチ南端の北約0.3mから約1.2mの範囲に、帯状に廻る黒褐色の旧表土層を検出した。この層の上端の標高は251.2m前後である。また、第2トレンチでもほぼ同じレベルで旧表土層が確認できたことから、同



第103図 第3トレチ平面図・断面図・出土土器

層は両トレンチ間でほぼ水平に堆積している可能性が高い。

遺物は、ほとんどが小破片であるが、古墳に伴うと考えられる壺がある。第103図1は小型壺の口縁部片で、外面下端にはハケメが見られる。2は棒状浮文を有する壺の口縁部片である。外面に貼り付け前の横方向のナデが見られる。3は二重口縁壺の破片で、内外面ともに丁寧にミガキが施されている。4は高壊ないし器台の裾部片で、外面はミガキが施されている。5は器台の脚部片で、円形の透かし孔が見られる。外面は丁寧にミガキが施されている。

3. 西側・第4トレンチ（第104図、図版46）

第4トレンチは、墳丘の西側に設定した幅約1.1m、長さ約13.5mの東西方向トレンチである。この部分は、墳裾を南北方向に伸びてコの字状に西に折れる溝状の落ち込みがあり、この落ち込みに南北を挟まれた部分は周溝の痕跡が不明瞭であった。調査の結果、表土直下で周溝を検出し、この部分も周溝が廻っていることを確認した。また、溝状の落ち込みも後世の掘削であることが判明した。

周溝は、第2トレンチと同様に、地山層の黄褐色ロームと黄褐色砂質ロームを掘り抜き、黄褐色砂礫土まで達している。墳丘側の上端と墳端にあたる下端の傾斜変換線はともに明瞭で、外側のそれも同様である。下端から上端への立ち上がりは、外側が急峻である。底面は外側の下端に向かって緩く傾斜し、底面標高は249.7mから249.9mの間にある。幅は上端約5.7m、下端約3.4mで、深さは検出面から約0.9m、表土上面からは約1.4mである。

周溝の堆積土は2層から8層にあたる。これらは、レンズ状の堆積状況であることから自然堆積と思われる。2層から5層にかけてはパミスが含まれており、特に4・5層ではその量が多い。

墳丘面は、木根の攪乱による凹凸が著しい。

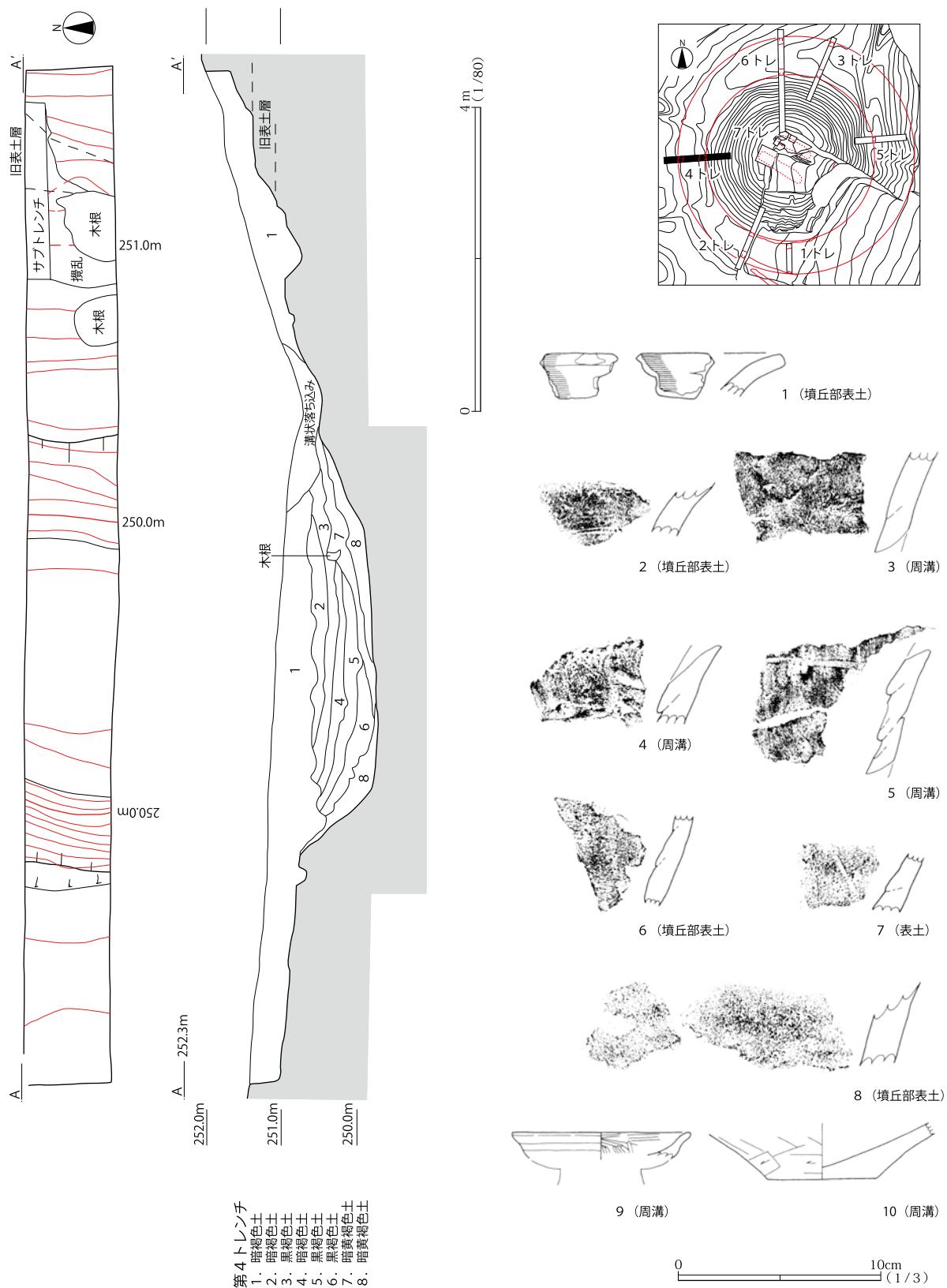
トレンチ東端の西0.55～1.3mと1.58～1.63mの範囲に、帶状に廻る黒褐色の旧表土層を検出した。この層の上端の標高は251.4m前後である。

遺物は、他のトレンチ同様、ほとんどが細片である。第104図1～8は、古墳に伴う壺と推定される破片資料である。1はラッパ状に開く口縁部の破片で、外面には僅かに赤彩の痕跡が見られる。2は口辺部片と思われる。3・4・6～8は胴部の破片で、8を除いて内面に粘土の積み上げ痕が明瞭に残る。5は頸部の破片であろうか。上半には横方向に沈線が引かれており、突起物を貼り付ける際の目印の可能性がある。内面は粘土の積み上げによる凹凸が著しい。9は器台の受け部で、体部外面に段を有する。内面はミガキが観察される。10は壺の底部破片で、外面にヘラケズリが観察される。

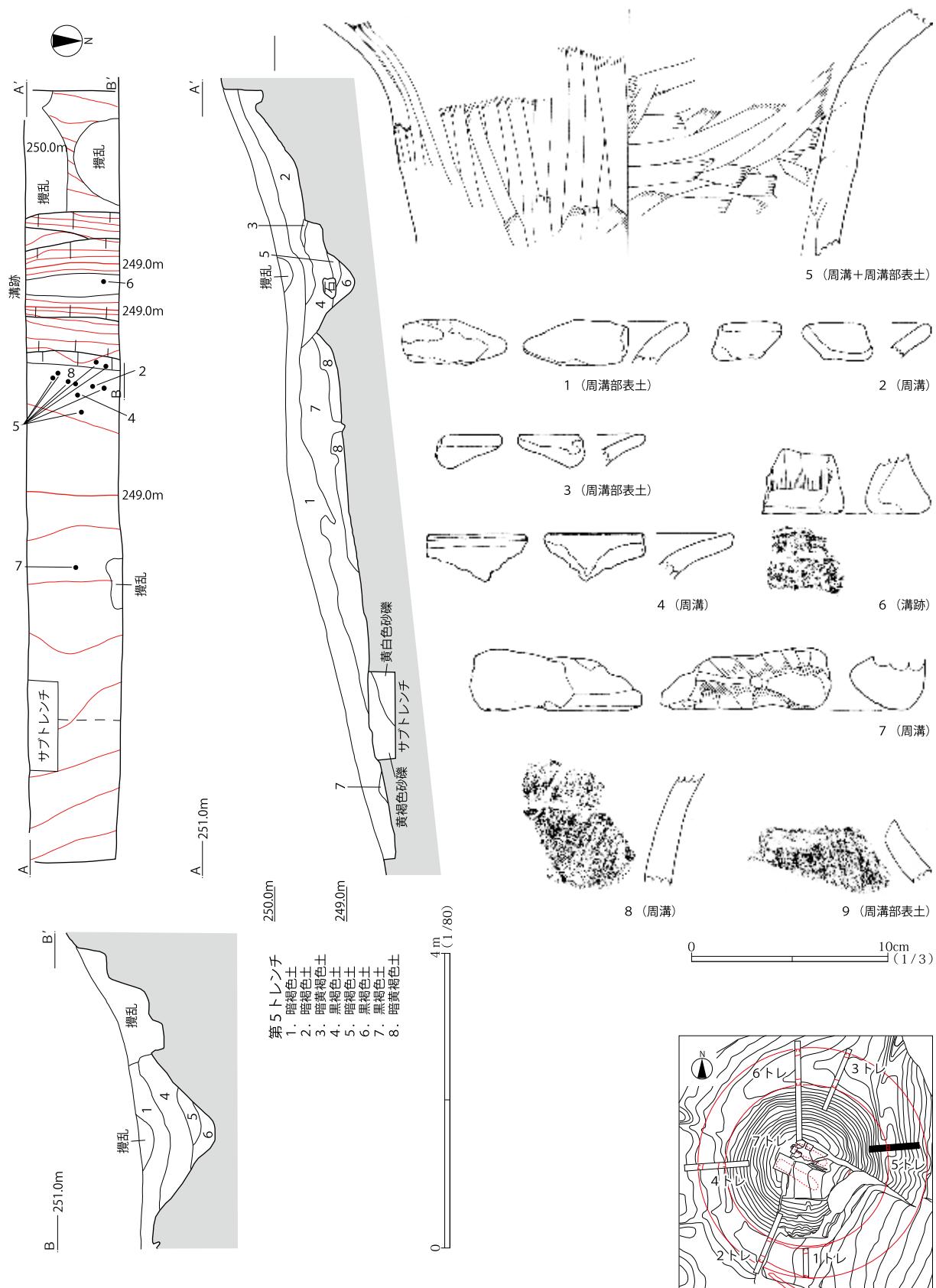
4. 東側・第5トレンチ（第105図、図版46・48）

第5トレンチは、第4トレンチの延長線上、墳丘の東側に設定した幅約1.3m、長さ約10.6mの東西方向のトレンチである。この部分は、墳丘の等高線が全体的に西に寄った状態で直線的に回っている。裾には墳丘を削るように南北方向に伸びて、北側が測量範囲外へ抜ける道が存在しており、これにより東西方向で幅3m前後の平坦面が形成されている。また、道の東側は台地から下る東向き斜面が続いている。これらによって周溝の痕跡が全く確認できない状況であった。このため、ここでは周溝の有無を確認することや墳丘斜面の状態を明らかにすることが主な目的となった。

調査の結果、表土直下で周溝とこれを切る溝跡を検出したが、周溝は他のトレンチとは若干様子が異なっていた。溝跡は、トレンチ西寄りの道跡平坦面下で検出した。道跡と同様に墳裾が南北方向に伸びており、西側



第104図 第4トレンチ平面図・断面図・出土土器



第105図 第5トレンチ平面図・断面図・遺物出土状況図

で墳丘面を、東側で周溝を切っている。幅は南壁際で約1.85m、北壁際で約2.13mを測り、北側がやや広がっている。深さは検出面から約0.72mである。断面形はV字状であるが、両壁面には崩落による段が見られ、特に墳裾側にあたる西側が顕著である。堆積土は2～6層にあたり、2・4層には少量のパミスが含まれていた。なお、掘削時期については、古墳より新しいことは分かるが、詳しい年代は不明である。

周溝は、溝跡の東側で検出した。墳丘側の上端と墳端にあたる下端の傾斜変換線はともに確認できたが、上端は溝跡に壊されてわずかに遺存する程度である。また、東向き斜面に作られているためか、底面はそれに沿うように検出され、堆積土も東に向かって徐々に薄くなっていたため、外側の上端と下端は確認できなかつた。底面標高は248.7mから249.2mの間にある。

周溝の堆積土は、7・8層にあたり、ともに斜面に沿って徐々に薄くなることから、自然堆積と思われる。7層の上半にはパミスが多量に含まれていた。堆積土の遺存状態から推定できる幅は最大で5m前後で、深さは墳丘側の立ち上がり付近で検出面から約0.5m、表土上面からは約0.7mである。

墳丘面は、北壁際と南壁際に木根などの攪乱があり、凹凸が著しい。なお、このトレンチでは旧表土層が確認できる部分まで延長していないが、掘り下げた範囲では地山層を削って成形している。

遺物は、いずれも細片であるが、古墳に伴うと考えられる壺の資料がある。第105図1～4はラッパ状に開く口縁部片である。5は、頸部上半から口辺にかけての資料である。外傾しながら立ち上がり、上半で大きく外反する器形である。外面は縦方向のナデ、南面は横や斜め方向のナデが施されている。器壁の厚さは1.4～1.9cmで、内面は積み上げ痕が明瞭である。頸部上半の復元径は約26cmである。6・7は、粘土紐を輪状にして、当初から底部を開いた状態で製作した開口底部の破片である。6は外面にナデ、7はナデとユビナデが残る。8は頸部片、9は体部上半の破片で、ともに外面に縦方向のナデが見られる。

5. 北側・第6トレンチ（第106図、図版46・48）

第6トレンチは、第1トレンチの延長線上、墳丘の北側に設定した幅約1.2mの南北方向トレンチである。段築や旧表土層を確認するため墳頂まで調査範囲を延長し、最終的に約20.3mの長さとなった。

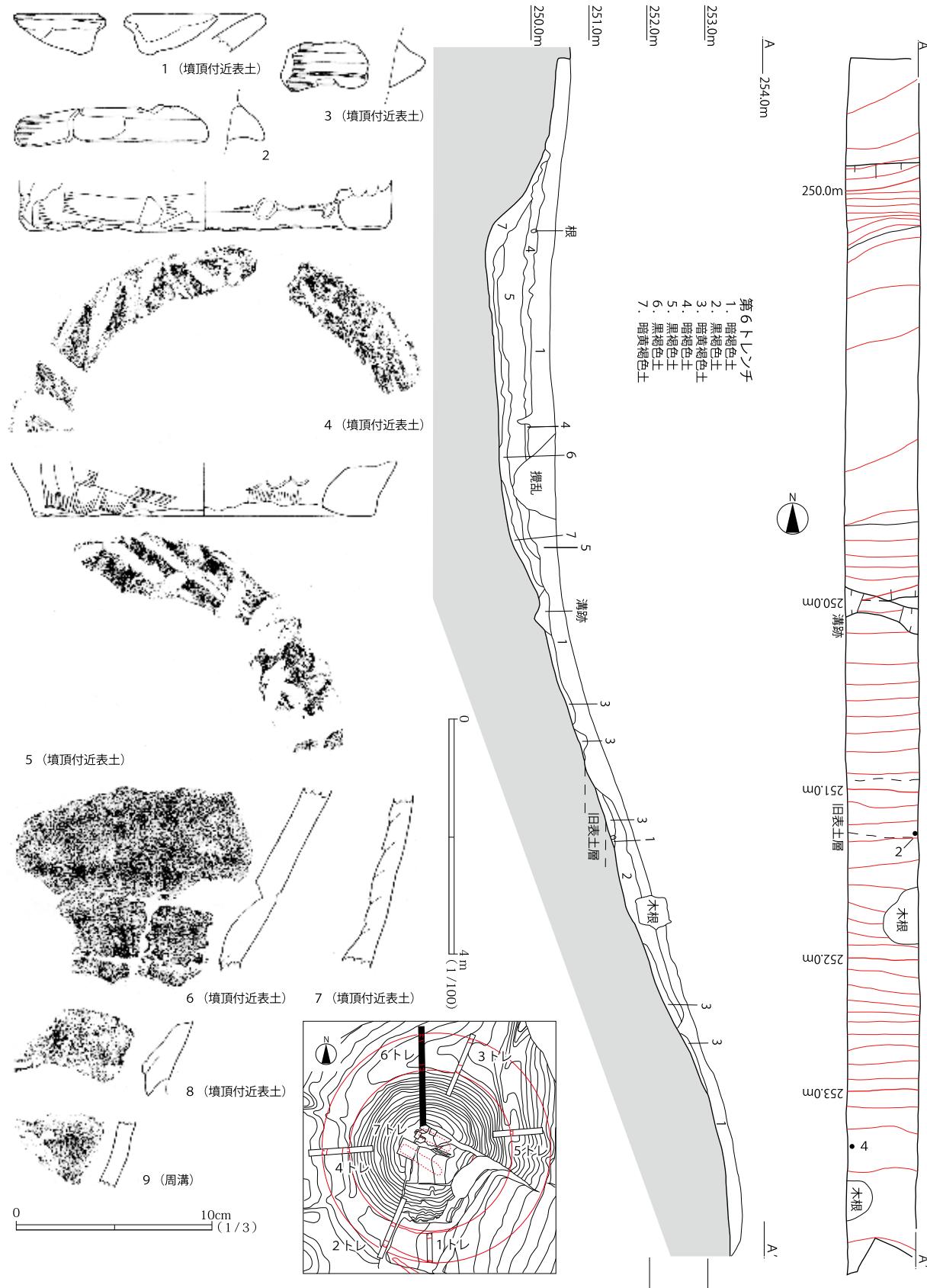
周溝は、東側に隣接する第3トレンチと同様に、地山層の黄褐色ロームと黄褐色砂質ロームを掘り抜き、黄褐色砂礫土まで達している。墳丘側の上端と墳端にあたる下端の傾斜変換線はともに不明瞭で、外側のそれはともに明瞭である。下端から上端への立ち上がりは、外側が急峻である。

底面は細かな凹凸はなく、外側の下端に向かって緩く傾斜している。底面標高は249.2mから249.5mの間にある。幅は上端約7.5m、下端約5.0mで、検出面からの深さは外側の下端付近で約0.9m、表土上面からは約1.2mである。

周溝の堆積土は4層から7層にあたり、これらはレンズ状の堆積状況であることから自然堆積と思われる。4・5層にはパミスが含まれており、特に5層の中位から下位でその量が多い。墳丘面は、標高251.3mから251.6mの間が若干緩くなる。周溝上端部分では、これを切る東西方向の溝跡を検出した。

トレンチ南端から北へ約7.52mから約8.51mの範囲に、帯状に廻る黒褐色の旧表土層を検出した。この層の上端の標高は251.3m前後である。盛土部分は断ち割り調査を行っていないので詳細は不明であるが、表面はややくすんだ黄褐色土で覆われており、互層状の積み上げは見られなかった。

遺物は、ほとんどが小破片である。第106図1はラッパ状に開く口縁部片で、2・3は、頸部あたりから剥離した突帶部の資料と思われる。4・5は粘土紐を輪状にして、当初から底部を開いた状態で製作した開口底



第106図 第6トレンチ平面図・断面図・出土土器

部の資料である。ともに内外面にナデや指頭圧痕が残り、外底面には丸棒状の圧痕が見られる。どちらも歪みが激しいが、復元底径は4が19.4cm、5が18.0cmである。6・7・9は体部の破片で、7の内面は積み上げ痕が顕著である。8は頸部の破片と思われる。

(4) 埋葬施設

1. 第1埋葬施設（第107図、図版47）

第1埋葬施設は、墳頂削平部の北寄りで検出した。木棺の陥没坑を伴う埋葬施設である。1号攢乱坑の西壁面を精査したところ、現墳丘面から20cm前後の深さで掘り方の北側立ち上がりとみられる土層の境界を確認した。境界の北側は黄白色砂粒を多量に含む黄褐色土、南側は黄白砂粒を含まない暗黄褐色土であった。さらに、この境界を追って攢乱坑の底面を精査すると、平面的に東西方向へ伸びることが確認できたことから、掘り方と墳丘盛土の境界であると判断した。

前述の通り、1号攢乱坑の西側壁面では、現墳丘面から20cm前後掘り下げないと平面的に境界を確認することが困難であった。そのため、壁面から西に向かって小トレンチA～Cを設定し、AからCの順に境界が明瞭となる深さまで掘り下げ、平面プランの確認を行った。その結果、Bトレンチでは北西コーナー、Cトレンチでは南西コーナーを確認できた。その後、黄白色砂粒の有無が境界となることを念頭に置きながら、南側と東側のプランを確認すべく再び精査を行ったところ、境界が判明し、全体プランを把握した。

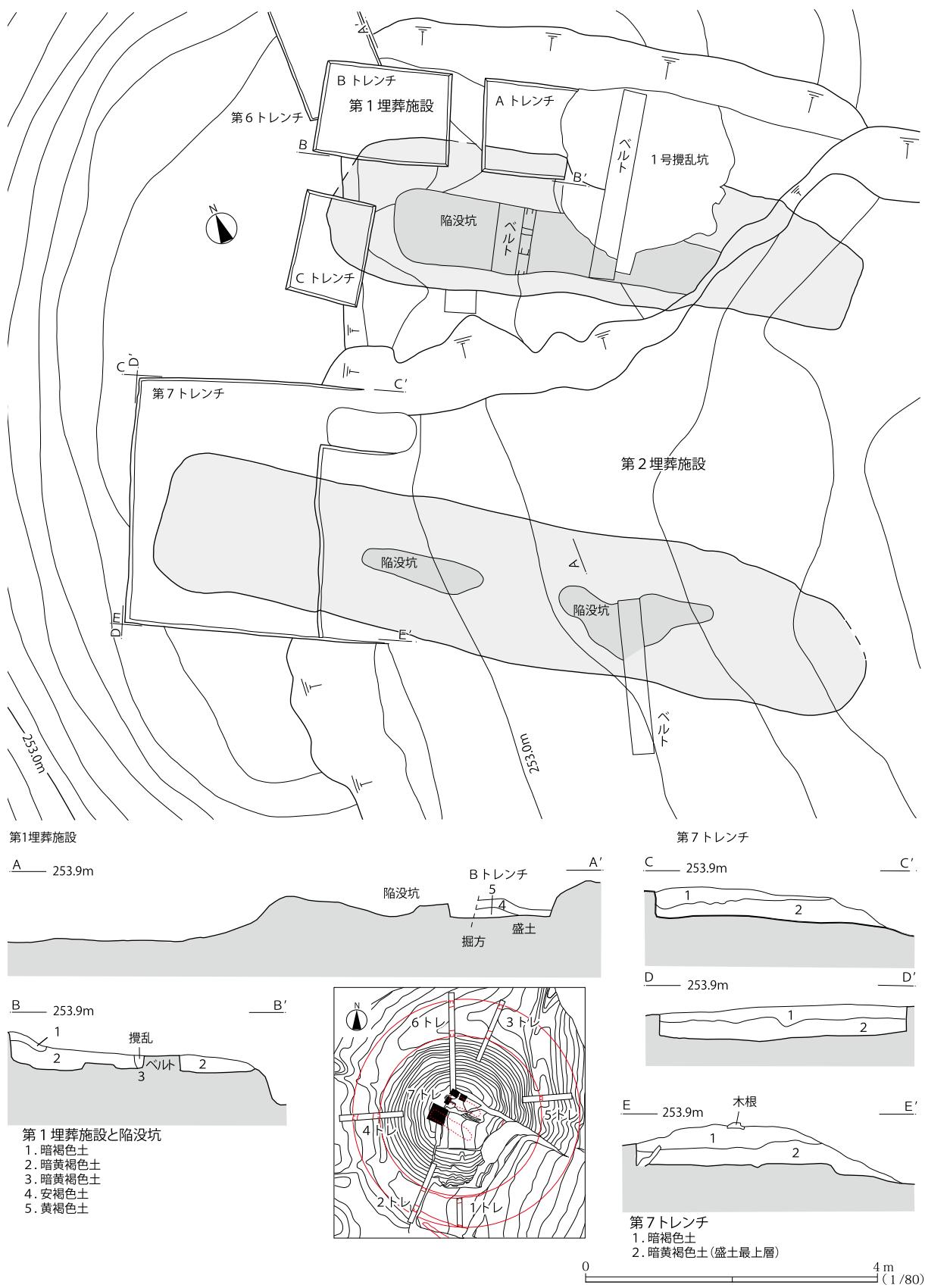
埋葬施設掘り方の規模は、長さ約7.3m、幅約2.0mで、主軸方向はN-60°-Wである。粘土などの痕跡は確認されていない。

2. 第2埋葬施設（第107図、図版47）

第2埋葬施設は、墳頂削平部の南寄りで検出した埋葬施設で、第1埋葬施設の南約3mのところに位置する。この周辺は、東西方向に伸びる複数列の重機のキャタピラー痕を底面レベルまで掘り下げ、北から南に向かって精査を行った。その結果、黒褐色土ブロック混じりの黄褐色土の広がりの中に、黒褐色土を含まない暗黄褐色土が東西方向に広がっているのを確認し、その中央に陥没坑と思われる不整形な落ち込みを2か所検出できた。そのため、この広がりを新たな埋葬施設の掘り方プランと認識した。

東端は削平部内で検出できたが、西端は削平部のさらに西に伸びていたことから、第7トレンチを設定し、西端の検出作業を行った。表土下の墳丘盛土最上面ではプランを確認できなかつたため、徐々に掘り下げたところ、西壁面で盛土最上面から約20cm、表土からは約40cmの深さで、西端のプランを確認できた。

埋葬施設掘り方の規模は、長さ約10.0m、幅約2.0mである。第1埋葬施設と同じく粘土などの痕跡は確認されていない。下部の遺存状態は不明であるが、長大なプランであり、木棺が納められていたものと思われる。



第107図 21号墳埋葬施設平面図・断面図

第7節 支群G

(1) 支群Gの概要 (第108図)

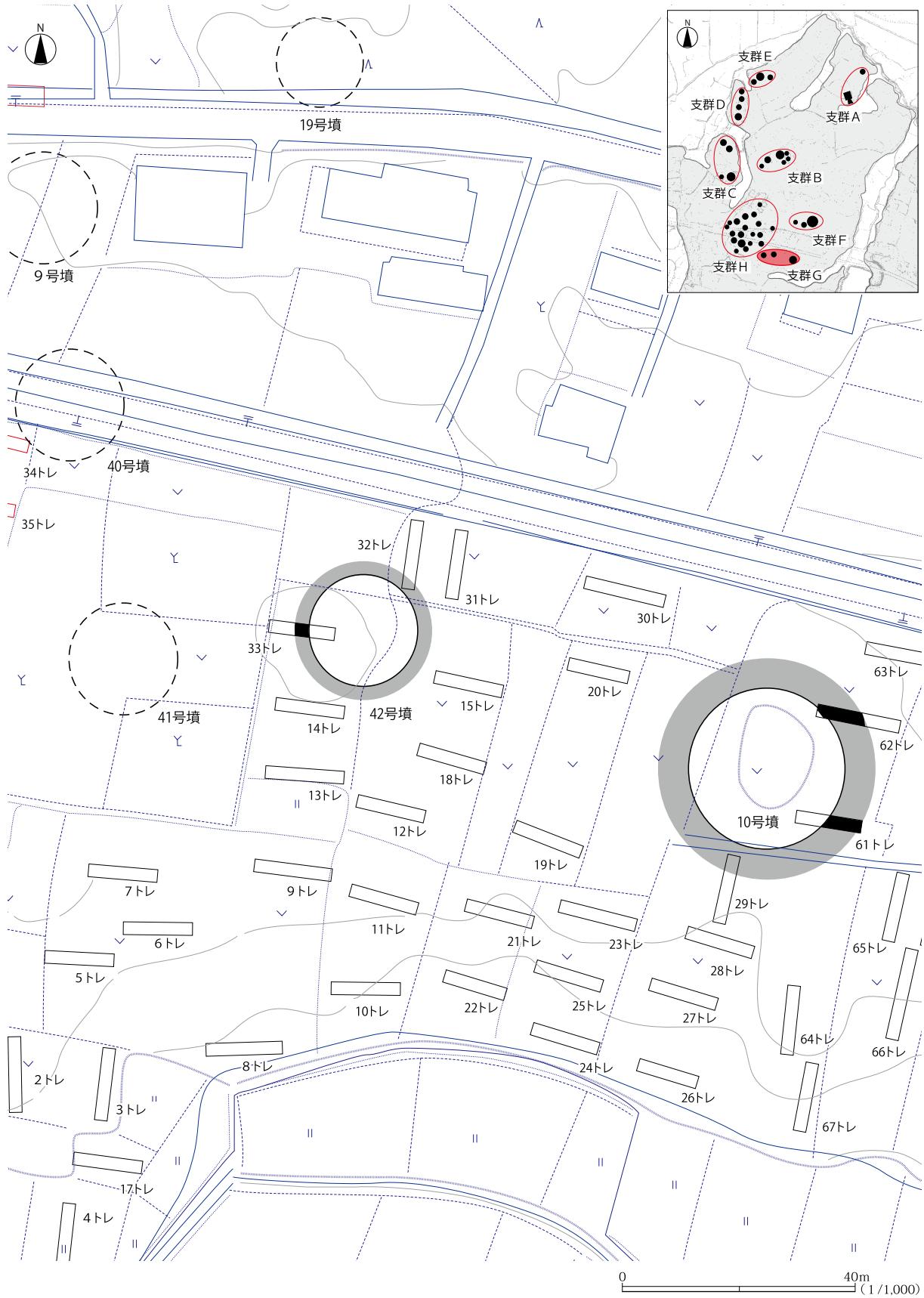
支群Gは、古墳群の南端に位置する。正直古墳群の築造される丘陵は、南から北に緩やかに向かって傾斜するが、支群Gの南は、小さな谷により南の丘陵と隔てられる。北側においては宅地開発などにより削平を受けているが、支群Fとの間には東方から緩やかな谷が入りこんでいる。当初より開発が進んでいたため、1964(昭和39)年の段階では、10号墳のみ認識されていたが、1983(昭和58)年の母畠地区遺跡分布調査の際に、10号墳の西側のトレンチで古墳の周溝が確認された。その古墳は後に42号墳とされた。さらにその西側に存在が知られていたのが41号墳である。

10号墳は直径25mほどの円墳と考えられる。その西側に位置する41・42号墳は、直径15mほどの円墳と考えらえる。42号墳は墳丘の西側にあたる第33トレンチで周溝を確認した。現在、10号墳は1辺12~15m・高さ1mの方形壇として残存する。41・42号墳の墳丘は削平されている。

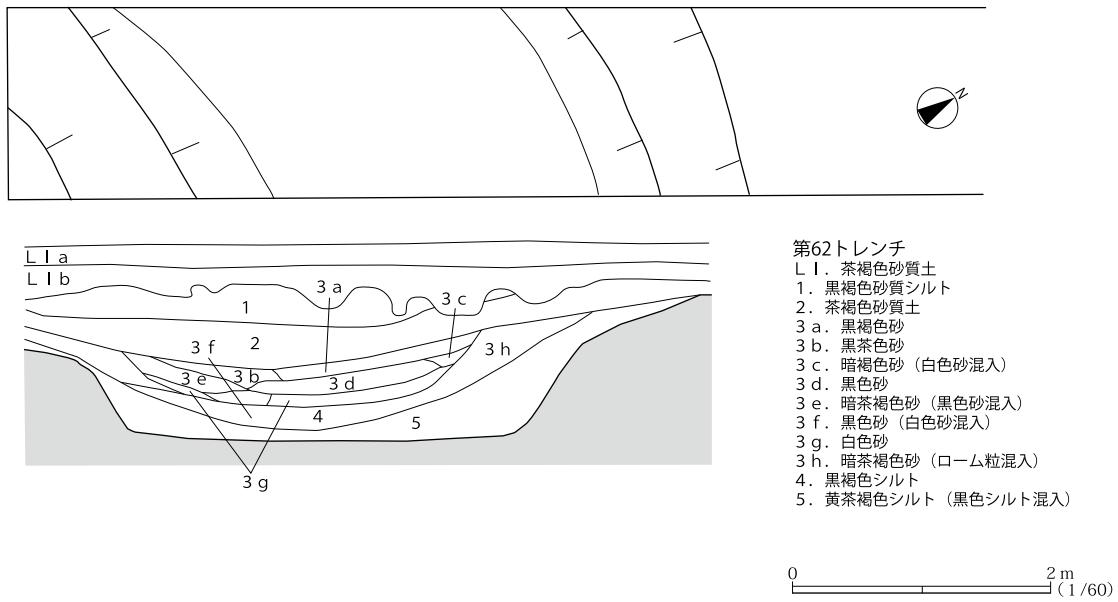
(2) 正直10号墳 (第109図)

支群Gの東端に位置する円墳である。現在、1辺12~15mの方形壇として残る。残存する墳丘の南側に第29トレンチ、墳丘の北東側に第62トレンチ、南東側に第61トレンチを設定し確認調査が行われた。その結果、第62・61トレンチで周溝を確認し、第62トレンチで掘り込み調査を実施した。

周溝の幅は、上端で400cm、下端で300cm、深さは110cmを測る。平坦な底面から両側の壁面が緩やかに立ち上がり、短軸断面形は逆台形を呈する。堆積土の中層には、FPと思われる白色砂層(3g層)が確認されている。周溝はレンズ状の堆積状況であることから自然堆積と考えられる。出土遺物は得られていない。



第108図 支群G地形図・トレンチ配置図



第109図 10号墳周溝第62トレンチ平面図・断面図



10号墳周溝第62トレンチ採取白色砂粒

第8節 支群H

(1) 支群Hの概要

1. 支群Hの概要と現況（第110・111図）

支群Hは、古墳群の南西端に位置する。南側の丘陵から伸びる台地は、正直古墳群が築造される台地に連続するように見える。しかし、微地形を観察すると、南東側では東側から伸びる谷により南側の台地と分断されていることが分かる。この東西200×南北200mの平坦な台地上に支群Hがあり、南西端は標高250.0mを測る。東側のやや北よりでは、北東方向に緩やかな丘陵が伸び、支群Fが位置する。その南側では同じように東へ緩やかな丘陵が伸び、支群Gがある。

支群Hは、この台地南西端の東西200×南北200mの範囲に密集する古墳により構成される。現在、JR水郡線及び県道田村安積線が東西に伸び、支群は南北に分断された形となっている。現在墳丘が残るのは、直径22mの14号墳と直径18mの16号墳の2基のみである。

2. 1～9・40号墳

県道の南側では西から1号～9号墳、そして新たに確認された40号墳がある。墳丘は現在いずれも消滅している。このうち、3・5・6・7号墳は母畠地区遺跡分布調査の際に、古墳の周溝を確認している。9号墳は、『福島県史』によれば、石室はなく内部から斧形石製模造品が出土した。この石製模造品は現在、福島県立博物館に所蔵されている。なお、近くの破壊された小円墳の蓋石の断片は「寄棟造りのようである」と記載されている。

3. 11～19号墳（第112図）

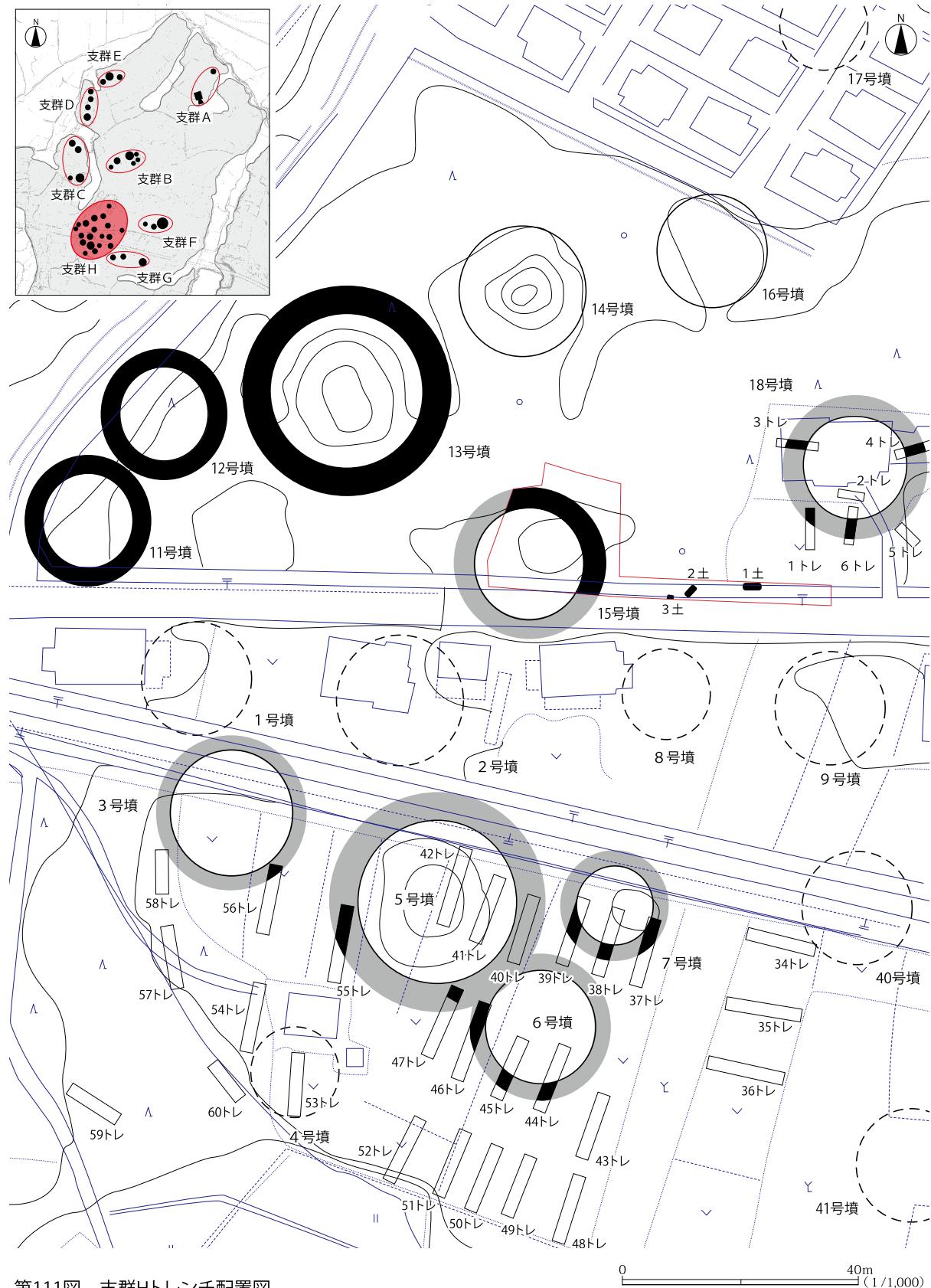
県道の北側では、西から11～19号墳がある。11～13号墳は、個人宅地造成のために1976（昭和51）年10月17日～11月25日に発掘調査がなされ、調査後に消滅した。この3基の古墳は標高250.0mの台地上にあるが、北西側は比高2.0mの谷が入り込んでおり、台地の縁辺に位置する形となる。11号墳は直径約9.5m・高さ0.8mの円墳で、250×50cmほどの箱式石棺が確認された。墳丘内旧表土より土器が多数出土した。12号墳は11号墳の北東に隣接し、直径9.5m・高さ0.5m程の規模となる円墳である。13号墳は12号墳の東に隣接する直径約20m高さ2.25mの円墳で、木棺の痕跡が確認された。墳丘内旧表土より土器が多数出土した。

14号墳は、13号墳の東に接する円墳で、直径22mを測る。現在も墳丘が残る。15号墳は、14号墳の20m南に位置する。県道田村安積線道路拡幅工事のため、1995（平成7）年8月31日～10月23日に調査された。調査の結果、直径17m・高さ1.8mの円墳であることが判明している。周溝及び旧表土上面より、土器・石製模造品が出土し、5世紀後半の築造であることが分かった。また、古墳に隣接して同時期と思われる土坑墓が3基見つかった。16号墳は14号墳の東に隣接する円墳で、直径18m前後の円墳で現在も墳丘が残る。17号墳は16号墳の北東約20mの位置にある。団地の造成により破壊された。

18号墳は15号墳の東約40mに位置する。現在は宅地となっているが、開墾のために消滅した古墳である。詳細は知り得ないが、封土の南端近くから鉄製品（刀・鎌等）が発見されたという記述がある。2024（令和6）年11月21日・2025（令和7）年1月21日に個人宅地造成に伴う試掘調査が実施され、確認された周溝から直径15mの円墳と考えられる。なお、古墳の東側には一辺50cmほどの板石が積み重ねられている。地権者に



第110図 支群H測量図



第111図 支群Hトレンチ配置図



第112図 11～13号墳測量図

よると、以前の宅地造成の際に出土したものであるという。そのため、埋葬施設は箱式石棺であったと思われる。18号墳の30m東側に19号墳がある。

(2) 正直11号墳

1. 墳丘 (第113~115図、図版49)

11号墳は、墳丘の高さが現地表面より約80cm、地山のローム面より約110cmの高さである。直径は約9.5mで、周溝を含めた直径は約15mほどである。調査時、墳頂部はかなり削平されており、平坦に近い状況であった。墳頂中心よりやや南側に、直径約200×220cm・深さ70cmの盗掘坑が認められる。

墳丘の堆積土は、墳頂近くで7層ほどに分かれ、墳裾の方では若干乱れている。中位から下位にかけては、茶褐色土・暗褐色土が主体となるのに対し、上位では①・②の黄色粘土層が主体となる。

2. 周溝 (第113・115図、図版49)

周溝の幅は、上端で200~220cm、下端で70~100cmを測る。堆積土の中層では白色砂粒層(6層)が見られ、その周囲に砂質の土壤が堆積する。これらは、レンズ状の堆積状況であることから自然堆積と思われる。

3. 埋葬施設 (第116図、図版49)

11号墳墳頂部の表土下約20cmの場所から数枚の側壁と底石が検出された。この箱式石棺と考えられる埋葬施設は南北に2基確認された。

北箱式石棺は、墳丘中心から2mほど北東に寄った位置にある。側石は20×20cm、10×30cmほどの不均等な板状石材を用い、東側は半分ほど残存し、西側は残存しているものはほとんどなかった。底石は20×25cmから5×5cmほどの大きさで、約半分ほど残存している。残存部分から考えて、長さ約250cm、幅50cmほどの規模と考えられる。埋葬施設の掘り方を確認するために南北の短軸方向で断面土層を観察したが、明確に確認することはできなかった。埋葬施設の内部からは遺物の出土は見られない。

北箱式石棺の南側には200×220m、深さ70cmにおよぶ盗掘坑がある。その南東へりに一辺約10~20cmほどの板状の石が4枚検出された。立った状態で検出されており、箱式石棺と判断できるため、南箱式石棺とした。南箱式石棺が墳丘中心にあり、中心埋葬と考えられる。攪乱の北西では埋葬施設の痕跡が確認できないことから、長軸規模は200cmを超えない規模と考えられる。

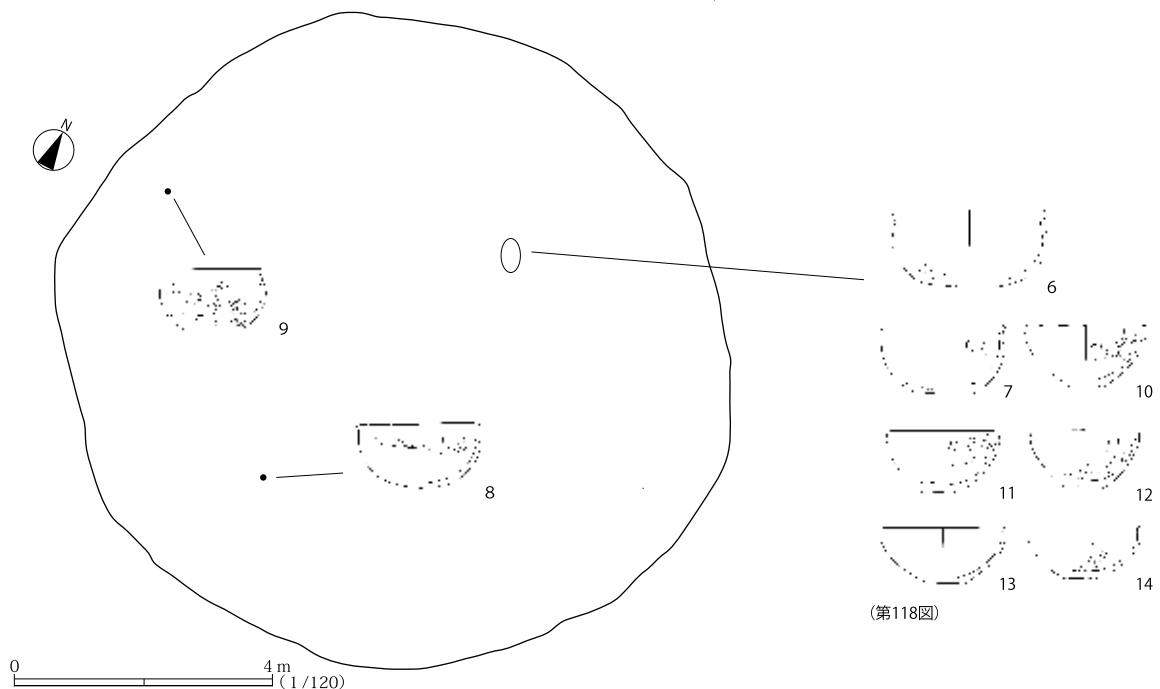
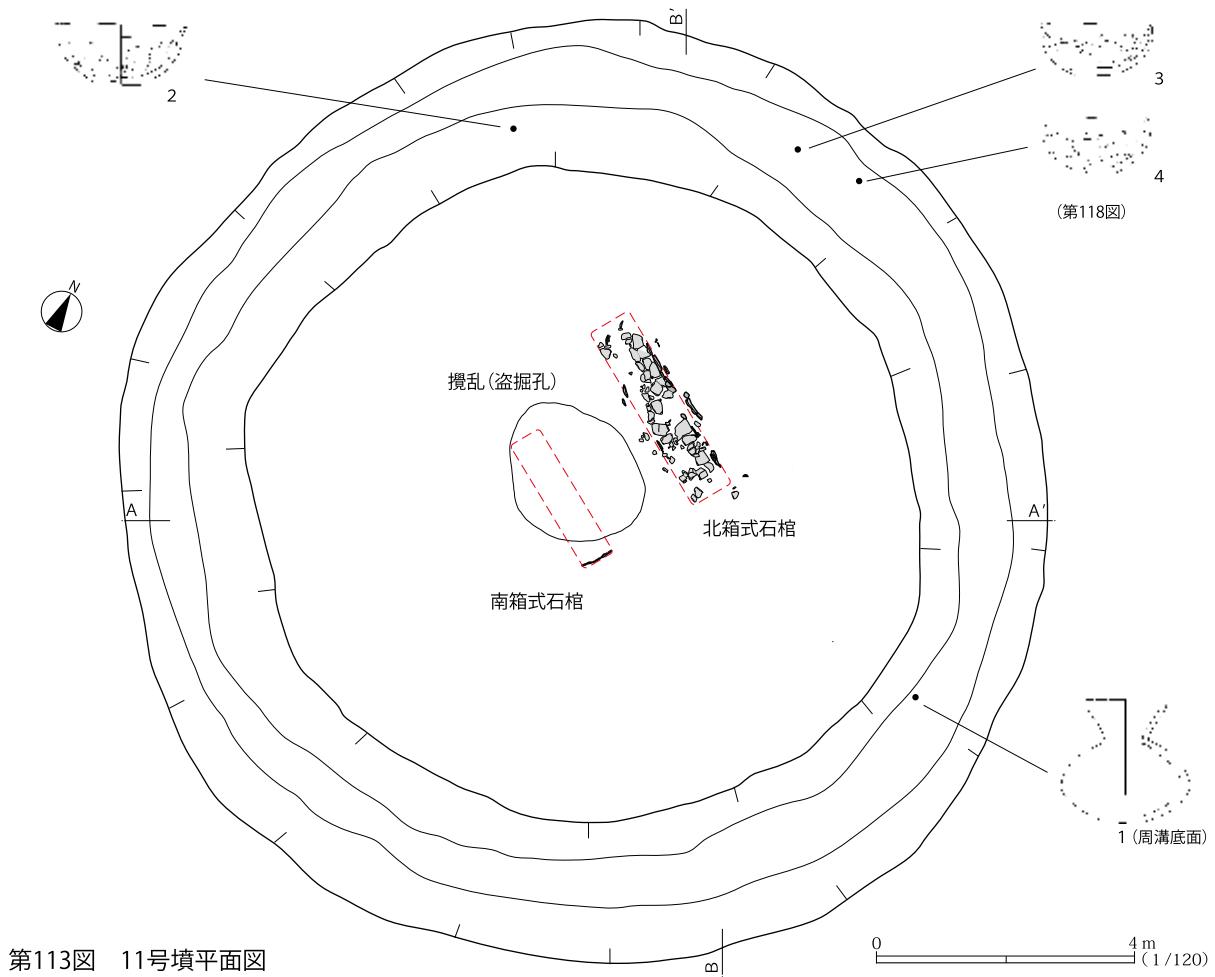
4. 出土遺物 (第117図、図版50)

土器は残存部分が比較的多く、図化できるものが14点出土した。周溝出土のものが4点、墳丘下旧表土層からの出土が9点である。1は壺で、周溝の底面直上から直立して検出された。胴部最大径15.2cmを測り、外方に張り出す。2~4は椀杯で、口縁部径12.5~15.5cmを測る。いずれも平底で底部付近はヘラケズリ調整を受ける。墳丘下旧表土出土のうち、6~9は口縁部が外方に屈曲する形態で、底部は平底あるいは平底風丸底である。10~14は口縁部径12.0~15.0cmを測る。平底の底部から緩やかに立ち上がり、口縁部が内湾ぎみに立ち上がる。

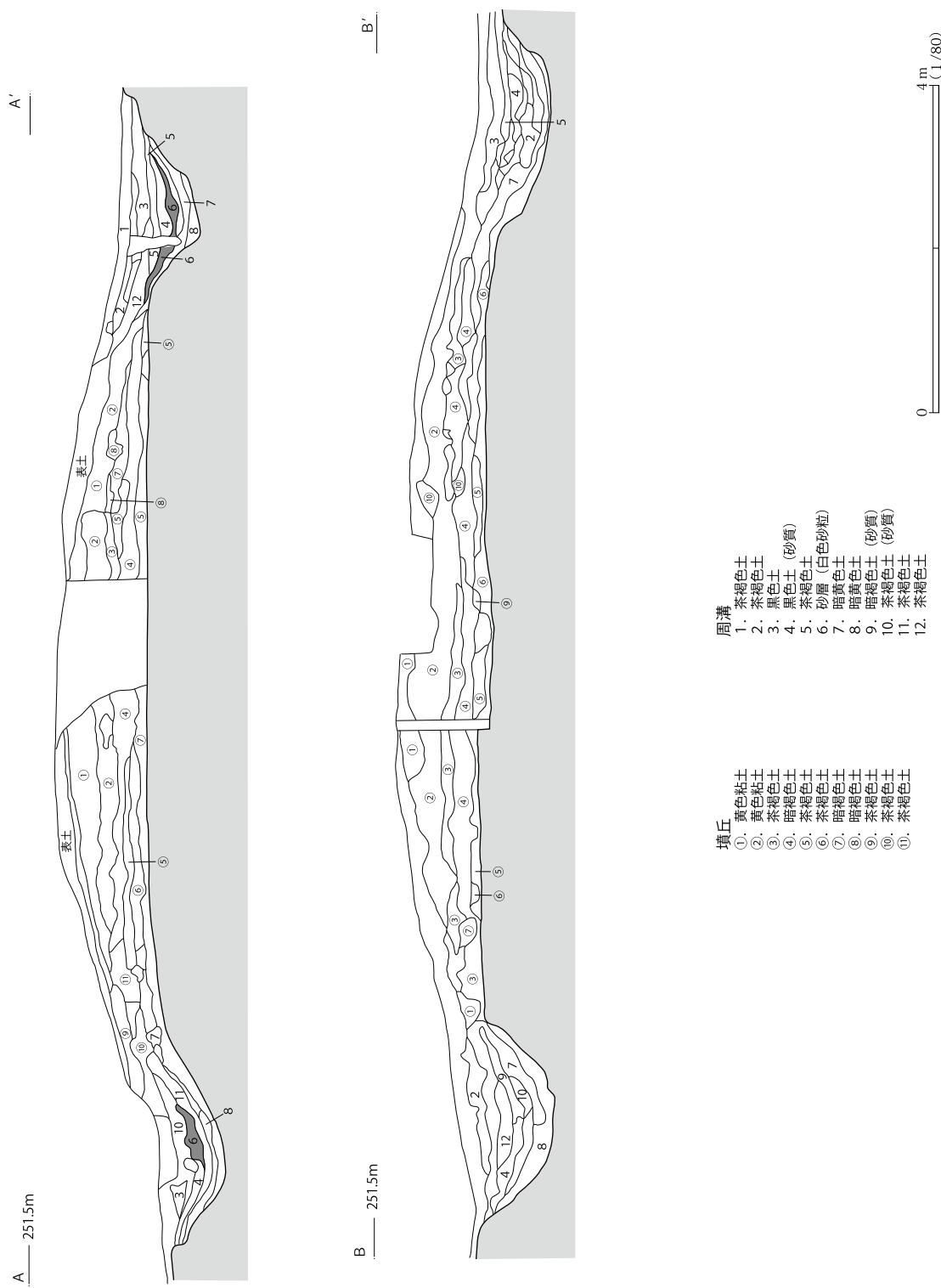
(3) 正直12号墳

1. 墳丘 (第118・119図、図版51)

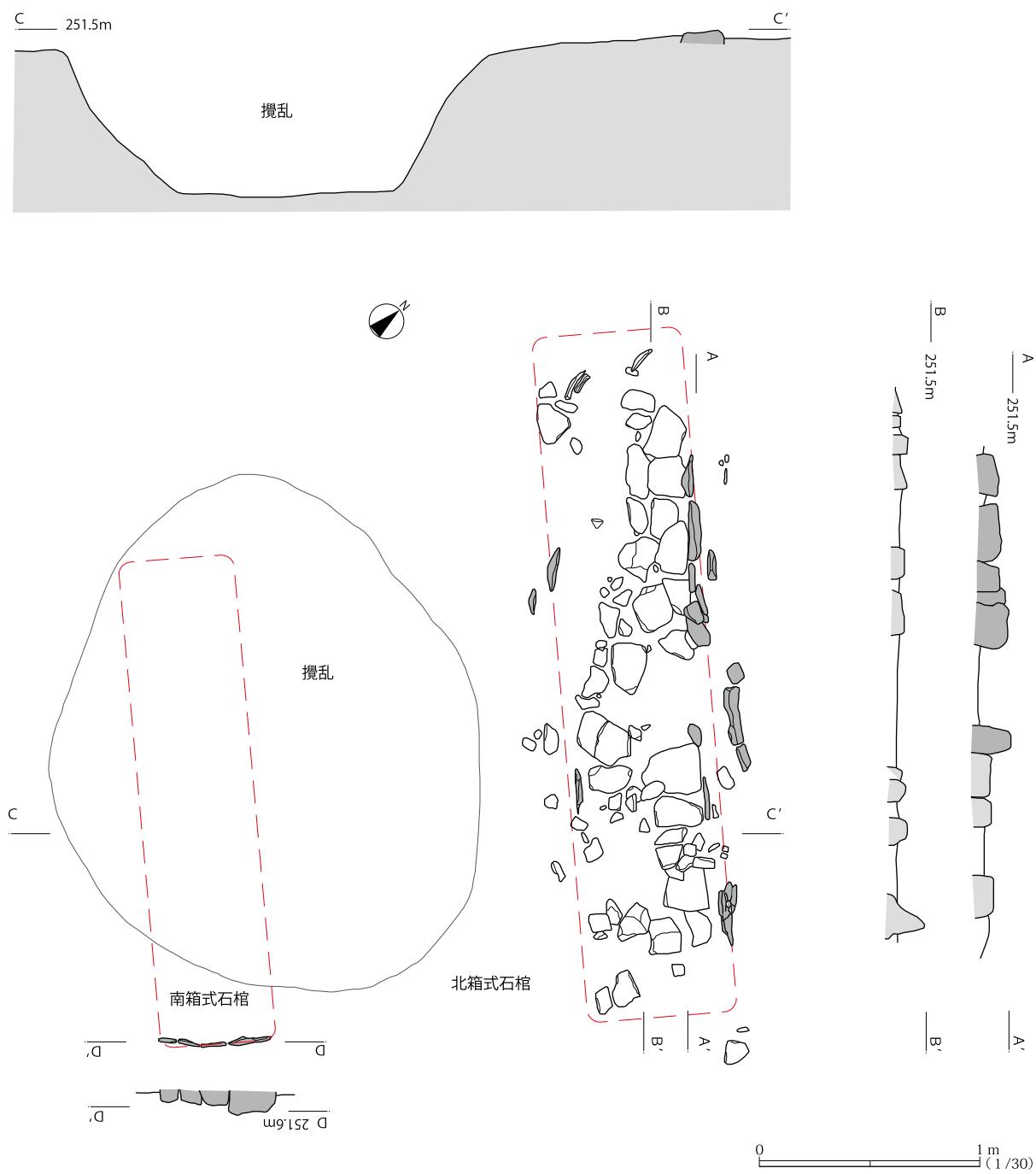
12号墳は、直径約9.5mの円墳で、周溝を含めた直径は約13mである。墳丘の高さは現地表面より約40~



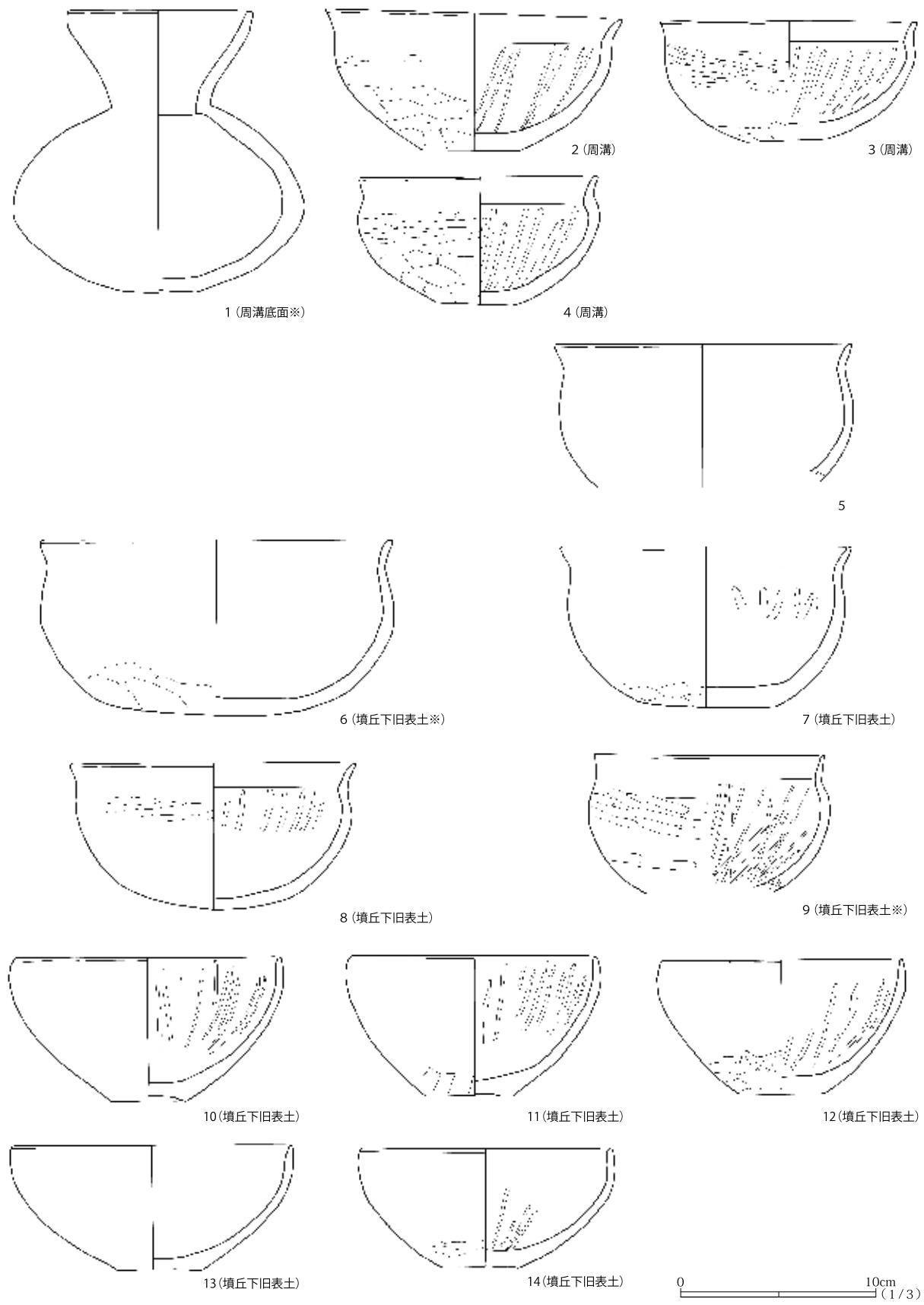
第114図 11号墳墳丘下旧表土出土遺物分布図



第115図 11号墳断面図



第116図 11号墳埋葬施設平面図・断面図



第117図 11号墳出土土器

50 cm、ローム面より約 80 cm である。11 号墳と同じように墳頂部はかなり削平されており、ほとんど平坦に近い状況である。墳丘の堆積土は墳丘中央で 5 層ほどに分かれる。最上層は①の黄色粘土で、中位から下位には褐色土系統の土層が堆積する。

墳頂部がかなり削平されていたため、埋葬施設の痕跡は確認されていない。

2. 周溝（第 118・119 図、図版 51）

周溝は、幅 140～180 cm・深さ 40 cm ほどである。周溝の中層から下層にかけて、白色砂層が堆積する。堆積層はレンズ状の堆積状況であることから自然堆積と思われる。

墳丘の西側周溝では、高坏が 5 個体出土した。北側から、300・300・110・130 cm の間隔で、周溝の底面付近から出土している。横転しているが、墳丘からの落下と考えることは難しい。

3. 出土遺物（第 120 図、図版 52・53）

出土した土器には、高坏・椀杯がある。比較的完形に近い状態に接合可能なものが多い。1～5 は周溝底面付近から出土した高坏で形態的特徴を等しくする。器高 15.0～17.0 cm を測る。脚部は坏部との接合部付近が中実となり、そこから外方へ緩やかに広がる。坏部は特徴的で、口縁部下端外面に段を形成し、口縁部はやや内弯ぎみに立ち上がる。坏部内面・脚部外面にヘラミガキ、坏部下端にヘラケズリが見られる。脚部内面には工具痕が確認される。6～8 は丸底の椀坏で、口縁部は内弯する。9・10 は口縁部が屈曲する形態のもの。11 は周溝から出土した広口の壺で、器高 16.0 cm を測る。

（4）正直 13 号墳

1. 墳丘（121・123 図、図版 53）

13 号墳は、墳丘の高さが現地表面から約 225 cm、地山のローム面より約 260 cm の高さである。直径は約 20 m で、周溝を含めた直径は約 25m である。11・12 号墳に比べると古墳の残りは良い。調査当時、墳丘には樹木が植えられ、土層はかなり乱れており、根による攪乱がいくつも確認された。焼土が混入する暗褐色土の旧表土層は、標高 250.0～250.8m に 20～40cm の厚みで堆積する。

2. 周溝（第 121・123 図、図版 53）

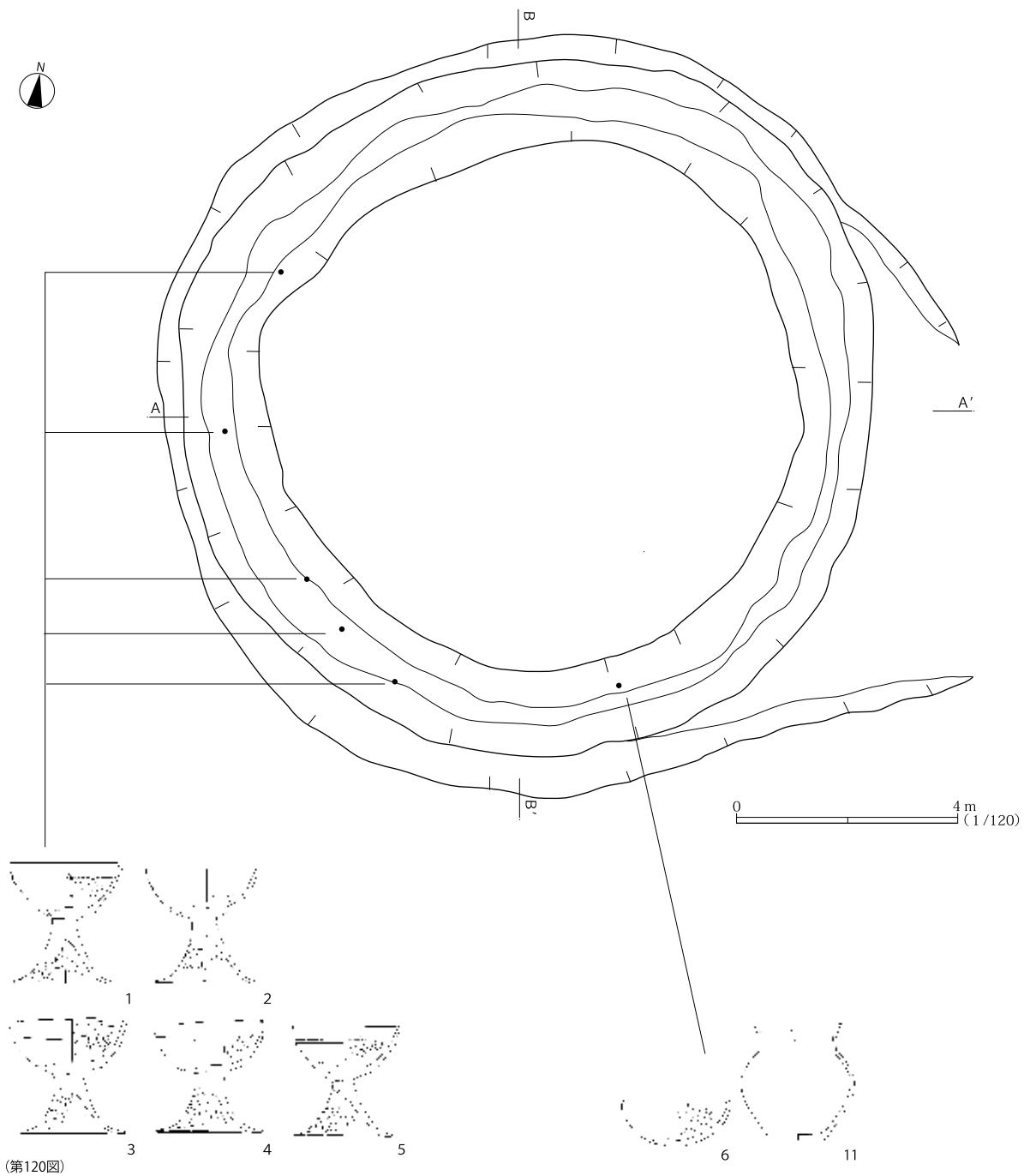
周溝の幅は、上端で 250～310 cm、下端で 70～100 cm である。検出面からの深さは 100～150 cm を測る。中位から下位にかけて白色砂層（3 層）が堆積する。堆積層はレンズ状の堆積状況であることから自然堆積と思われる。

3. 埋葬施設（第 124 図、図版 54）

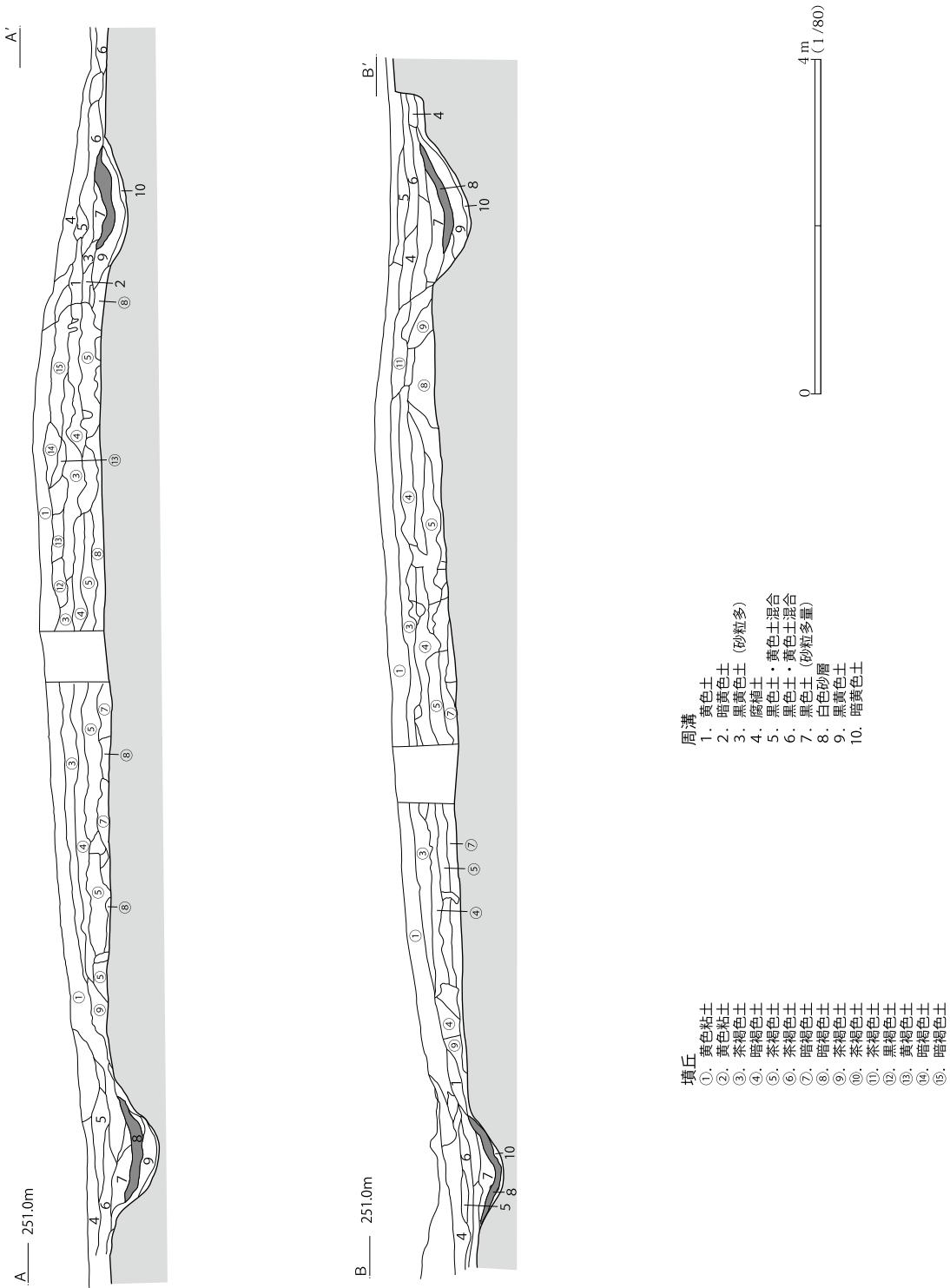
13 号墳は、東・西、南・北方向に十字状のベルトを残して掘り下げた。ローム面まで掘り下げたものの、埋葬施設の痕跡は検出することができなかった。セクション図化後、セクションベルトの除去に着手したところ、東西ベルトと西北ベルトの交点の墳頂部下 140cm ほどのところから、木炭の薄い層が検出された。その木炭の層の面を検出すると、残存部分で約 55×30cm ほどの大きさになり、ゆるやかな舟底形を呈していることが判明する。断面土層に暗褐色土の落ち込みが確認できたので、墳頂部から掘り込まれたもと考えられる。埋葬施設は、木炭の残存状態・形態から、木炭櫛ではなく木棺直葬ではないかと思われる。

4. ピット（第 122 図、図版 54）

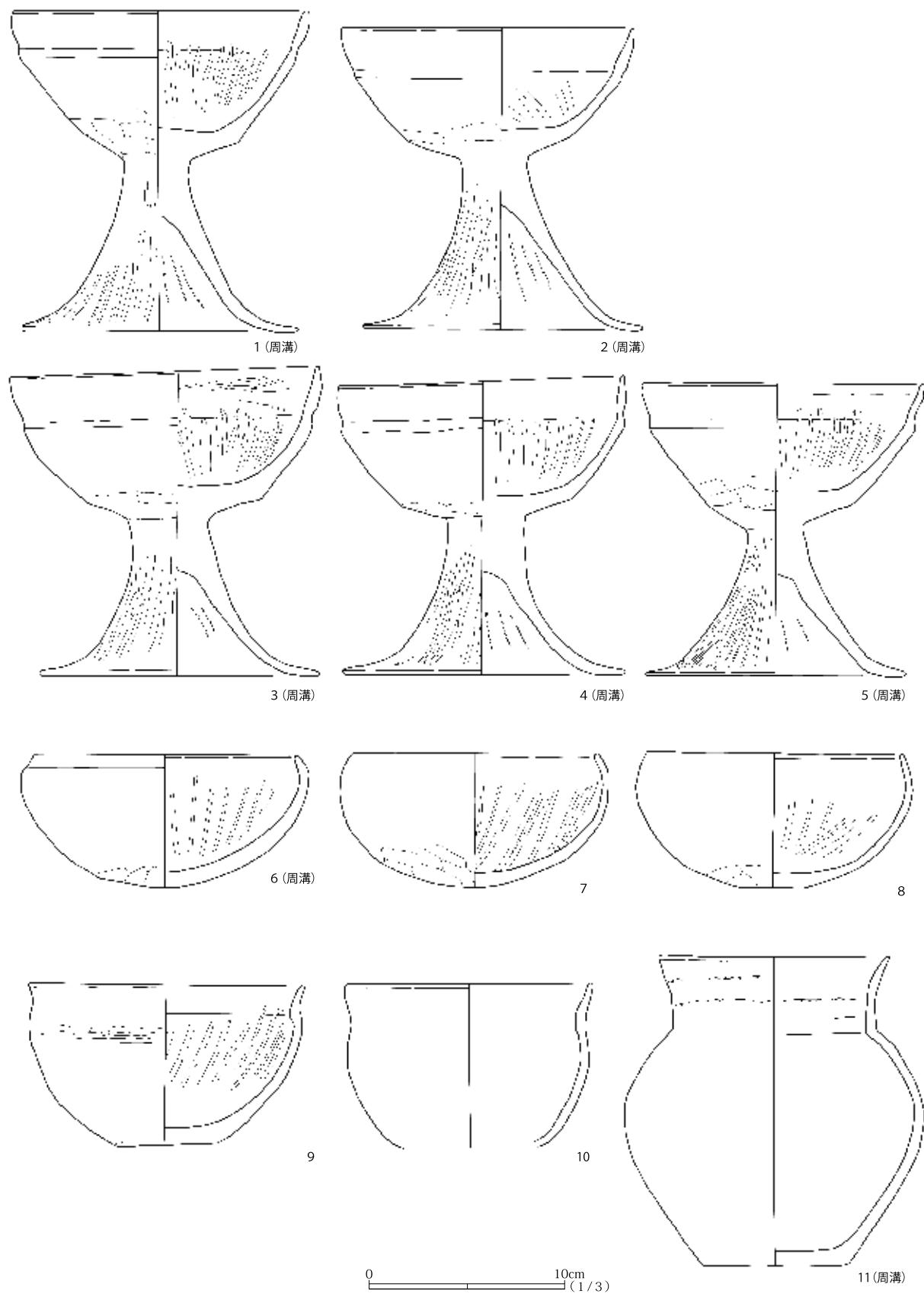
13 号墳を全面ローム面まで掘り下げたところ、円形のピットが検出された。そのうちの 1 基からは土器が



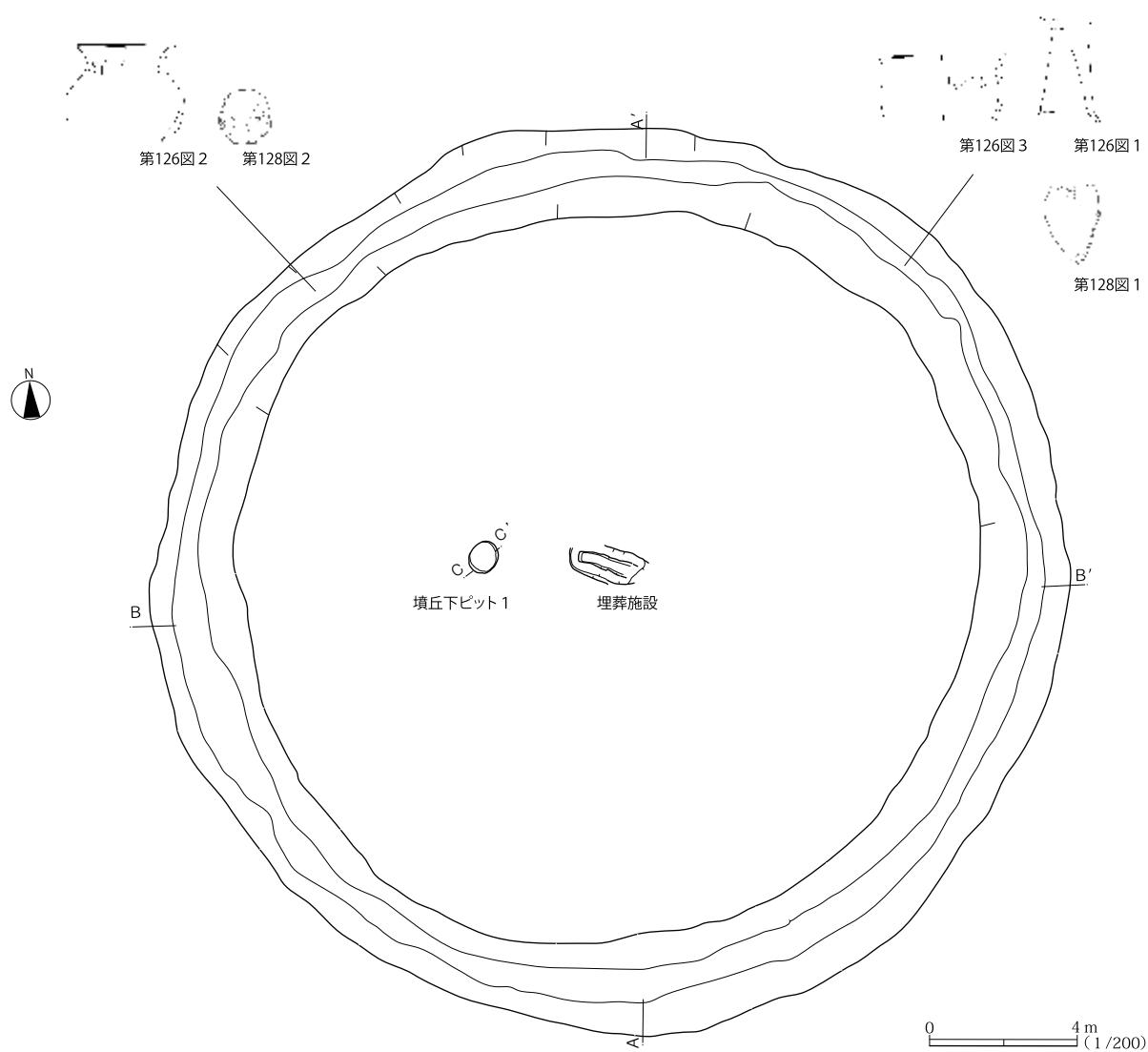
第118図 12号墳平面図・出土遺物分布図



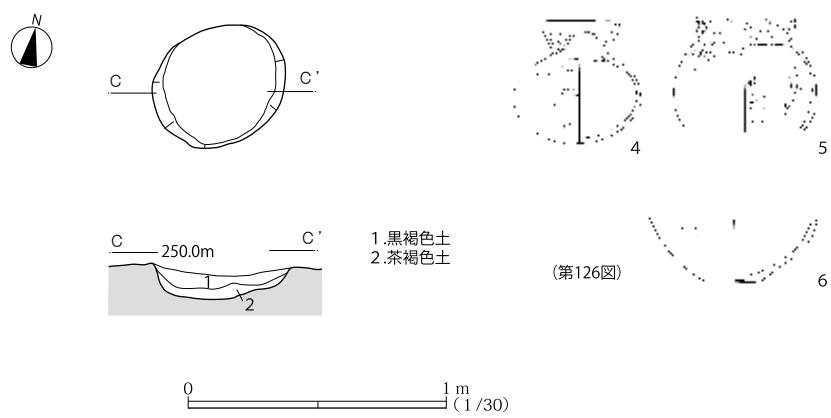
第119図 12号墳断面図



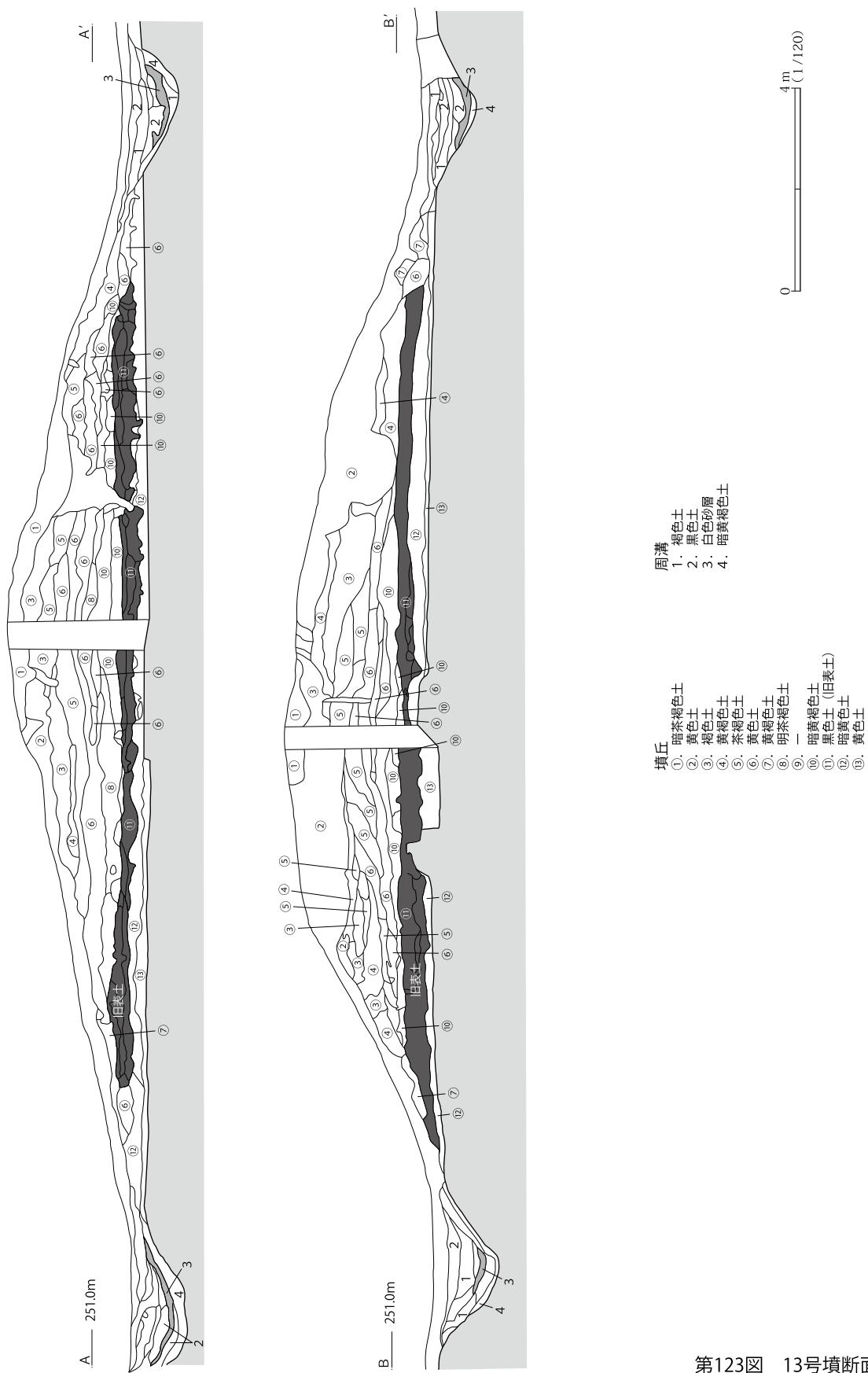
第120図 12号墳出土土器



第121図 13号墳平面図



第122図 13号墳埴丘下ピット



第123図 13号墳断面図



第124図 13号墳埋葬施設平面図・断面図

1点ほぼ完形で出土した。古墳築造直前あるいは築造の過程で土器を埋納するために作られたものと思われる。

5. 出土遺物（第125～128図、図版54～57）

鉄鏸・石製模造品・土器が出土した。鉄鏸は、埋葬施設から束ねられた状態でまとめて出土した。全体的に鏘膨れが著しく欠損部分も多く、茎に矢柄などの有機質が付着しているものも多数見られる。片刃の長頸鏸が29点、平根式が2点である。全容をうかがえる資料はないが、最も残りの良い第125図1は残存長16.5cmを測る。出土した鉄鏸の茎部には有機質が付着しているものが認められる。これらは、鉄鏸に付着していた矢柄の痕跡と思われる。24～27は樹皮巻きと考えられる。

土器は、旧表土と思われる暗褐色土直上からの出土が最も多い、ピット内からも出土した。また、周溝からも出土している。第126図1～3は周溝から出土した。1は欠損していない完形品で、器高13.4cmを測る。器台・高坏の脚部のようにも見えるが、用途は明らかではない。4～6は墳丘下のピットから出土した。4は中型の壺で、器高15.0cmである。体部外面にヘラケズリ、口縁部外面にヘラミガキが見られる。5は広口の壺で、口縁部及び体部内外面にヘラミガキが観察される。他と異なり赤褐色を呈する胎土で、表面は平滑に仕上げられている。7は高坏脚部、8・9は丸底の椀坏、10は広口の壺である。第127図12は壺、13～15は甕である。16は厚手で鉢状の器形を呈する。甕の底部から体部下半を製作し、乾燥する前の段階で口縁部風に断面を成形し、完成品としたものと考えられる。17は砥石である。

石製模造品の第128図1は剣形で、同図2の有孔円板とともに周溝から出土した。3及び4の勾玉はベルト内で出土した。この他、滑石の剥片5～8と、18cmの原石9が出土している。

（5）正直15号墳

1. 墳丘（第130図、図版58・59）

15号墳は、調査前の地目は山林で、古墳南側は県道によって削平されていた。15号墳の発掘前の測量調査によって、規模が東西の墳端で15m、南北は北側墳端から県道まで13.0m、高さ1.9mの円墳と認識され、古墳の最高標高は墳丘の東寄りで測点された。また、現況では周溝状の落ち込みは観察されなかった。調査後の古墳の規模は、15号墳の南と西側が調査区外にあるため明確でないが、推定される内寸での直径は17mである。墳丘は30cmの旧表土面に180cmの高さで確認された。

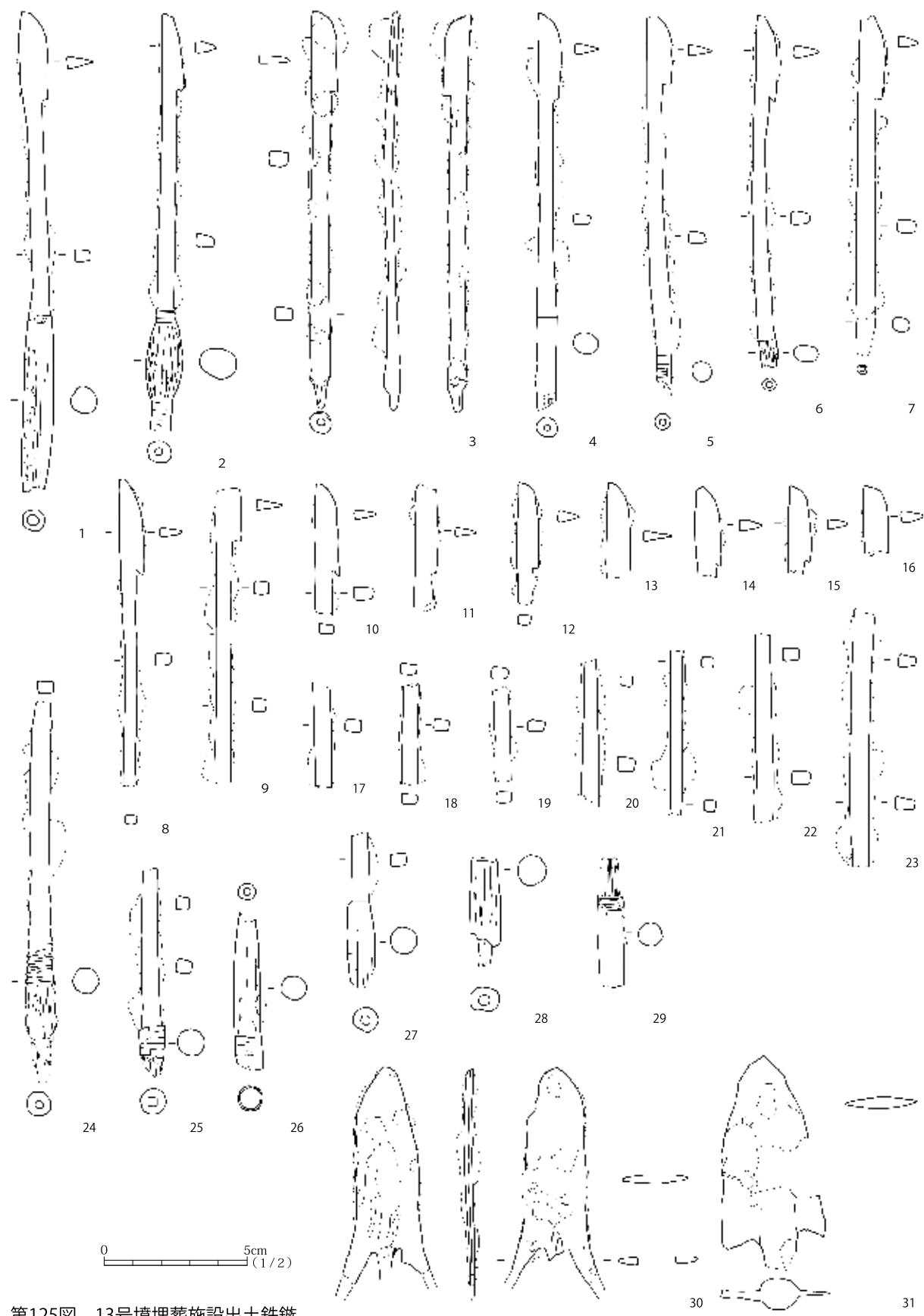
旧表土の暗褐色土は、標高250.0～250.5mに、10～15cmの厚みで堆積する。墳丘の積み方を見ると、先ず周溝の内側に周囲の旧表土を主体とする暗褐色土③をドーナツ状にめぐらせ、その内部に旧表土と地山ロームとの混合土②を埋める。そして、頂部にローム土の黄色土①を積み上げて古墳を完成させていることが分かる。

2. 周溝（第130図、図版58・59）

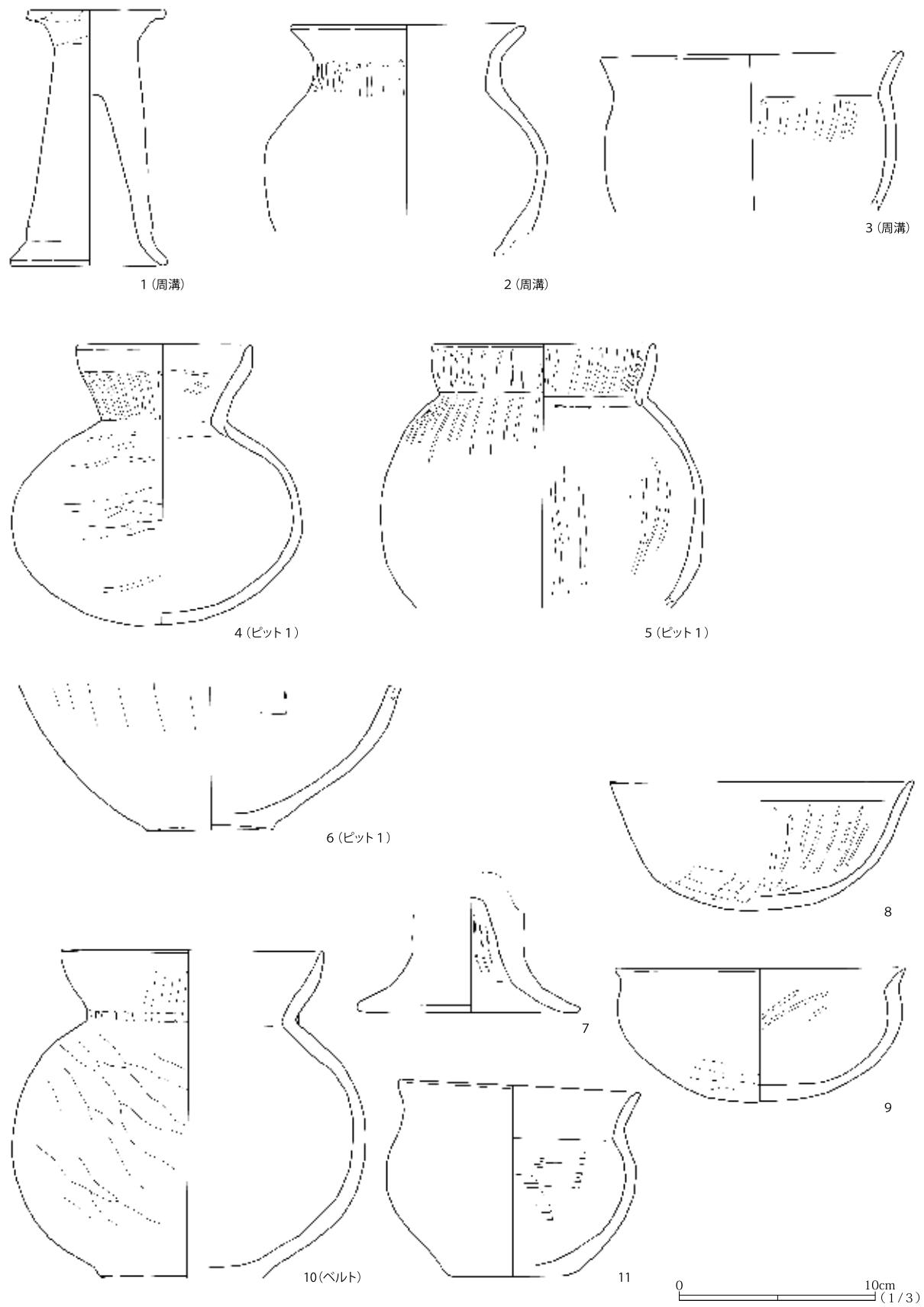
周溝は幅280～400cm・深さ80～140cmを測る。断面形は鍋底状を呈し、純層に近いハミス層（5層）が中位に堆積する。堆積層はレンズ状の堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

3. 埋葬施設

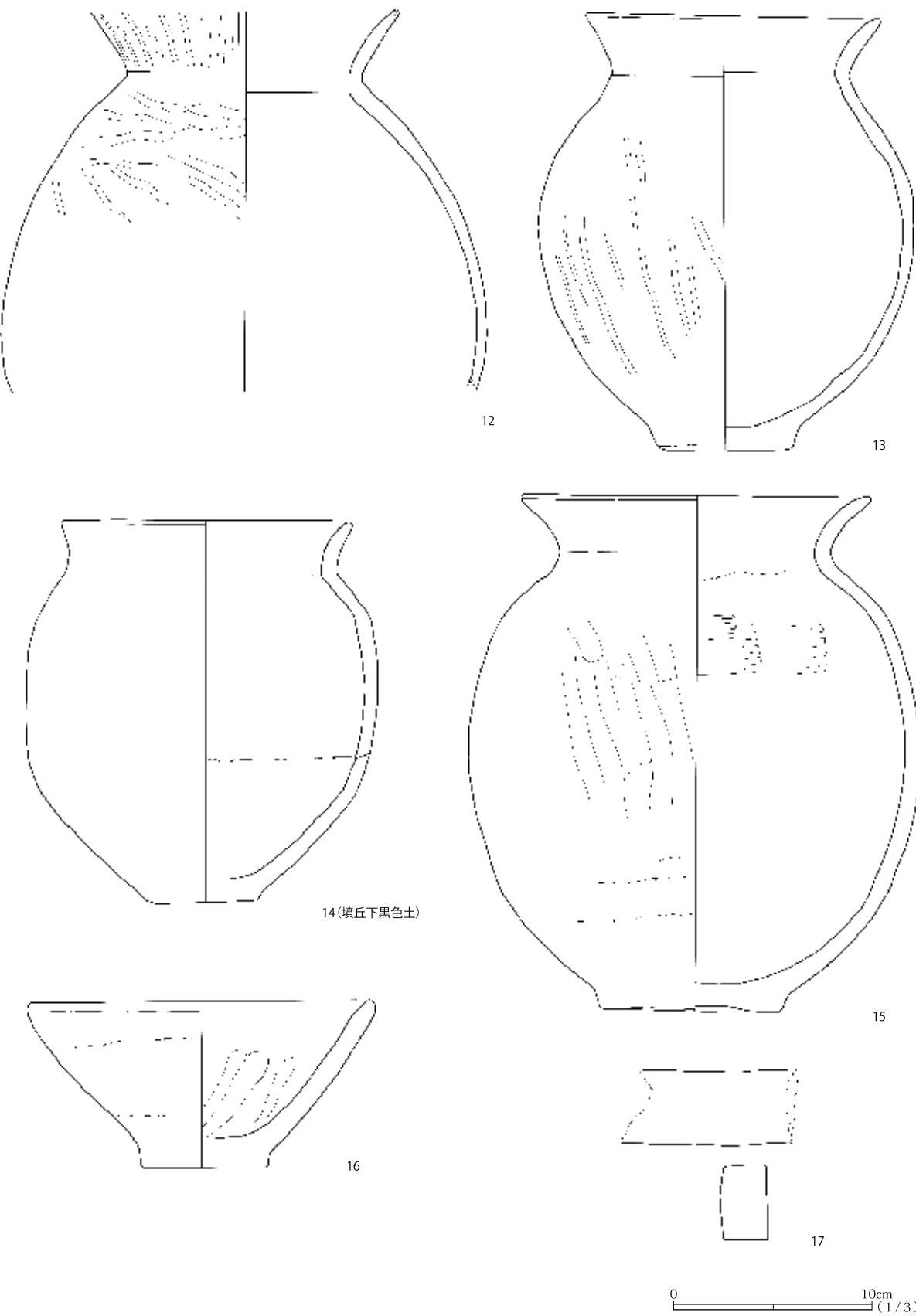
埋葬施設は確認できなかった。腐植土を除去した後、墳丘頂部から中・小の凝灰岩の割り石を検出したが、並びは緩慢で構築したような面は認められず、精査やトレンチ調査によつても掘り方や据え方は確認されな



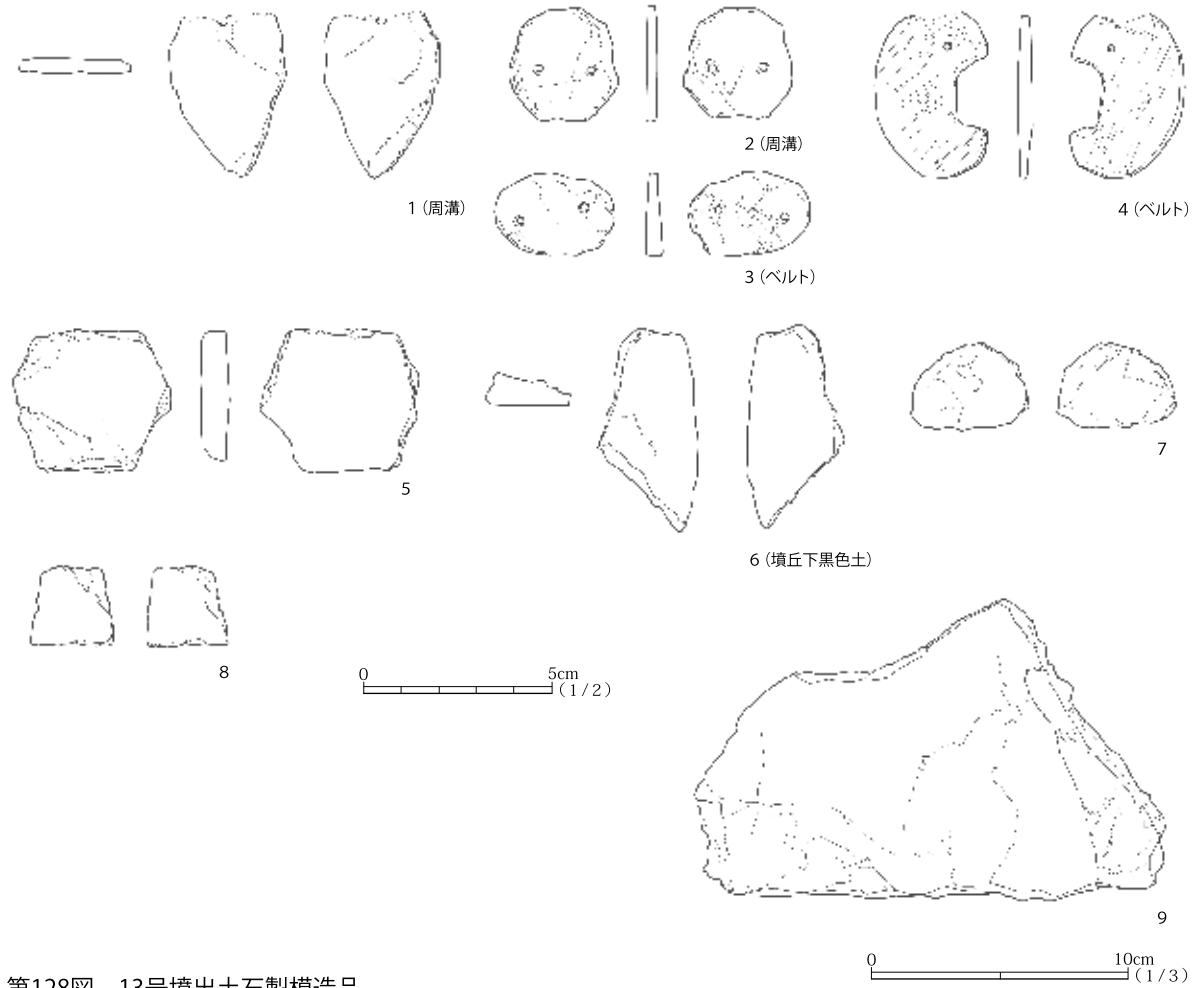
第125図 13号墳埋葬施設出土鉄鏃



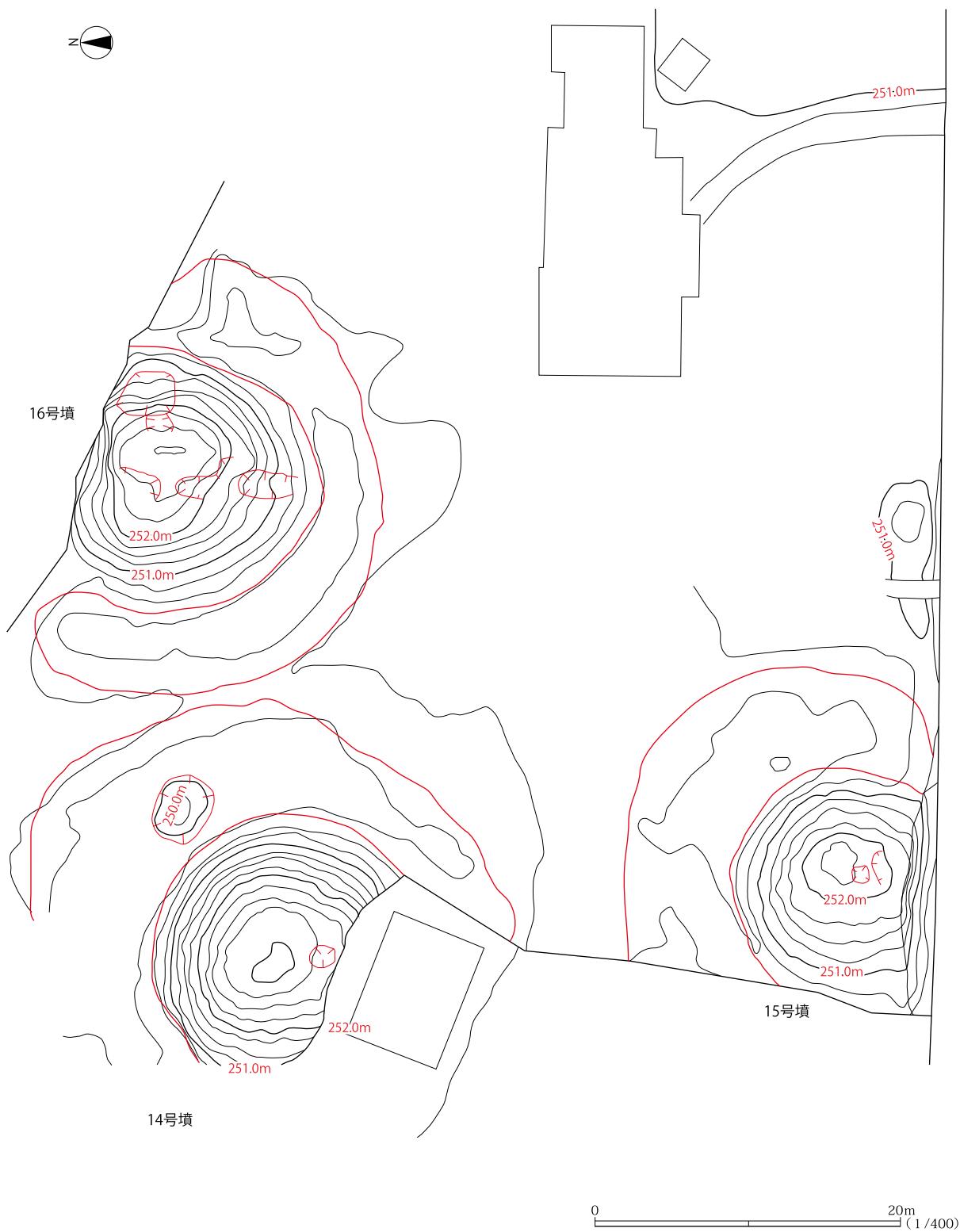
第126図 13号墳出土土器



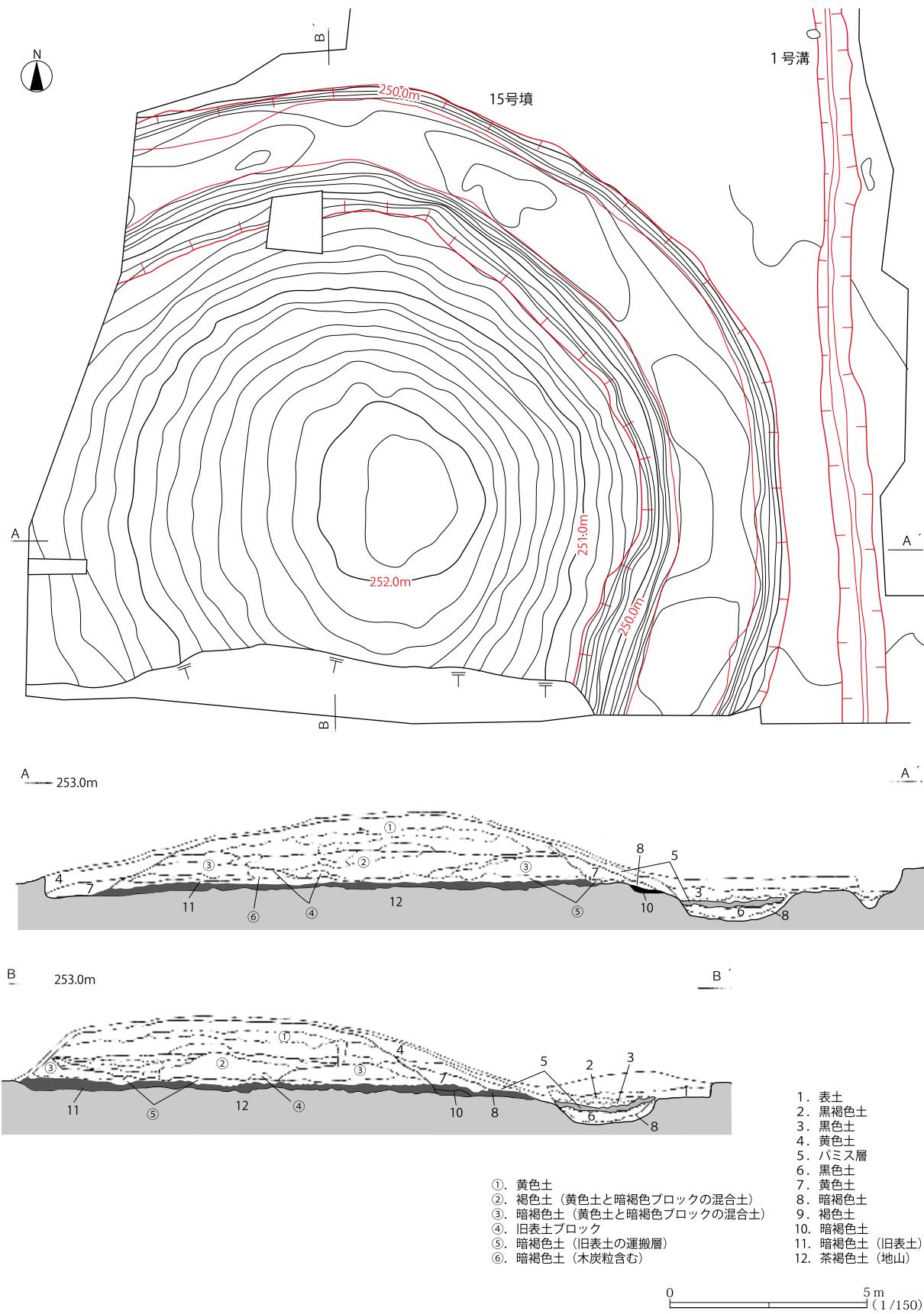
第127図 13号墳出土土器・砥石



第128図 13号墳出土石製模造品



第129図 14～16号墳測量図



第130図 15号墳平面図・断面図

かつた。検出された凝灰岩は、箱式石棺の残欠である可能性が高いものと考えているが、割り石に混じって遺物は出土していない。凝灰岩の割り石は、15号墳の周溝最上層や15号墳に隣接する1号溝でも出土しており、15号墳の埋葬施設が箱式石棺で、後世の盗掘よって棺材が拡散したものと考えている。よって、1号溝出土の剣形石製模造品（第136図1）は、15号墳に伴う可能性が高いものと思われる。

4. 出土遺物（第131～136図、図版60・61）

遺物は、周溝内・旧表土上面・墳丘盛土から出土している。このうち、墳丘盛土から出土した弥生土器や墳丘内出土の椀坏は古墳に伴わない。

周溝内の遺物の出土状態としては、散乱するように周溝東側の底面直上層～パミス層直下から出土した石製模造品の双孔円板（第131図）・土器（第132図）と、北側の底面から横倒位で出土した甕11に分けられる。石製模造品は4点出土し、このうち全容が知られる1・2は双孔円板である。第132図1・2は高坏で、1は器高13.6cmを測り、いずれの脚部も裾に向かって大きく広がる。3・4は中型壺、5～7は椀坏である。10・11は甕でラグビーボール状の体部から口縁部は直立ぎみに立ち上がる。

旧表土上面では、第133図の双孔円板が4点出土している。4は穿孔が側面に寄った位置に穿たれる。第134図1は高坏の脚部、2・3は中型壺、4・5は口縁部が小さく外方に屈曲する丸底の椀坏である。9・10は甕で外面にヘラミガキが顕著に見られる。

墳丘盛土内部からは、第135図1の椀坏と弥生土器が出土した。

周溝の外縁から1m離れた位置にある1号溝から、第136図1の剣形石製模造品が出土している。扁平で鎧は形成されない。全長5.5cmを測る。

（6）土坑墓（第137・138図、図版59）

15号墳墳丘の東側では、県道に沿って幅3.5m・長さ37mの範囲が調査され、土坑墓が3基検出された。最も東に位置するのが1号土坑墓で、西側に8mの間隔を置いて2号土坑墓が、さらに2m南西方向に3号土坑墓が位置する。

1. 1号土坑墓

1号土坑墓は、主軸方向を東西に持ち、南壁面の上端は攪乱によって一部削平されていた。規模は、上端で長軸270・短軸145cm、下端で長軸260・短軸90cm、深さは確認面より75cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁面は直立に近い。なお、西壁面は底面より45cmのところから、上端に向かって緩やかに開く。平面形は、上端・下端とも長方形を呈している。堆積土は、上層にパミス層が観察される。

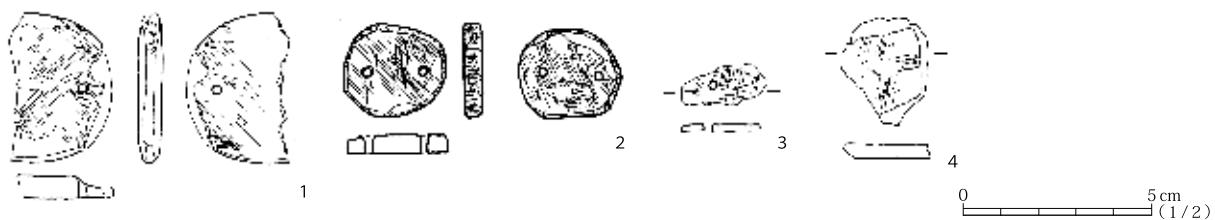
2. 2号土坑墓

2号土坑墓は、主軸方位はN-36°-Eを示す。その規模は、上端で長軸180cm・短軸115cm、下端で長軸130cm・短軸80cm、深さは確認面より62cmを測る。平面形は、上端・下端とも長方形を呈し、下部の壁面は直線的に立ち上がり、底面より20cm上から上端に向かってわずかに外方に広がる。

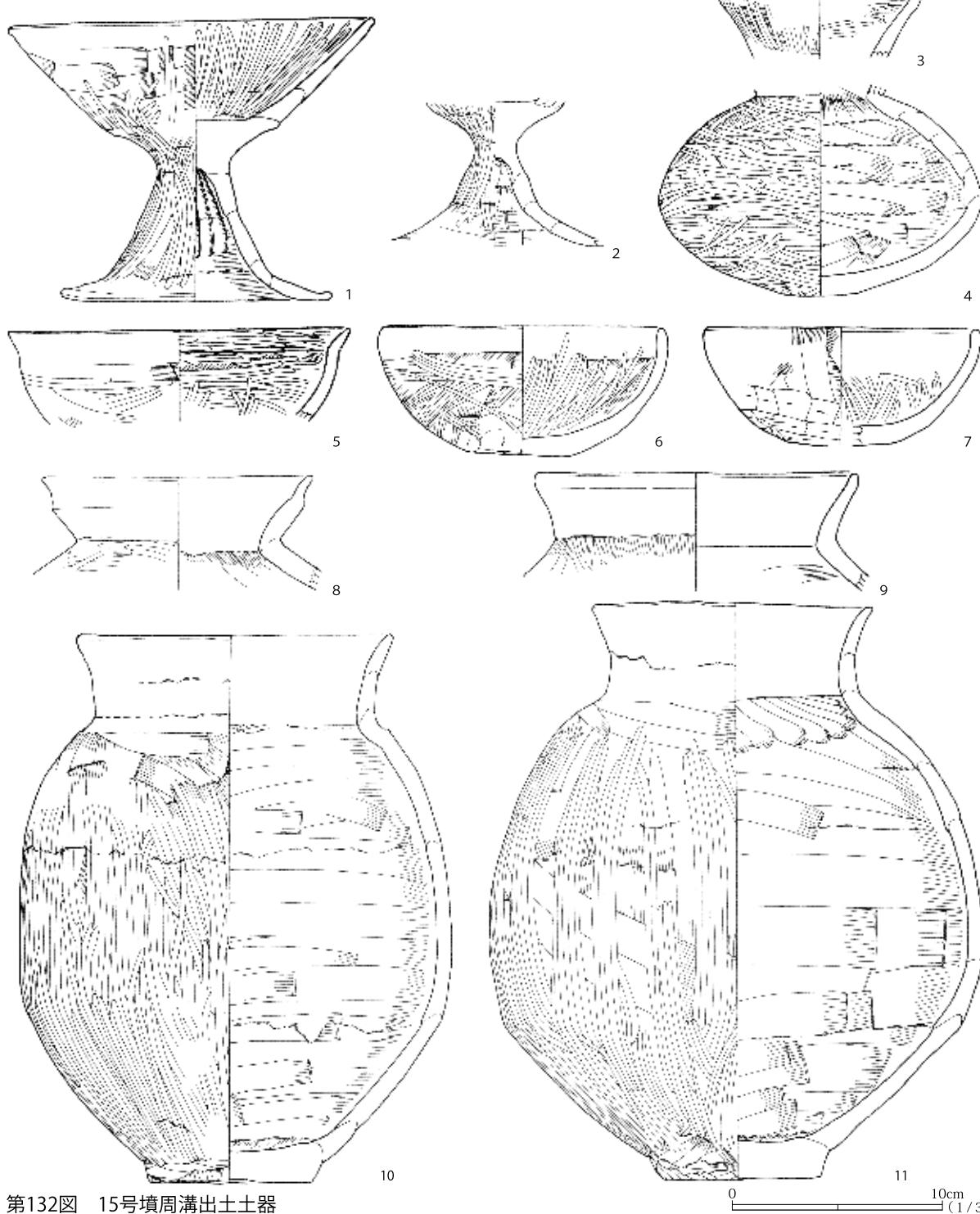
土坑墓からは鉄製品が出土した。鏽化が進んでおり、遺存状態は悪い。断面は二等辺三角形状を呈していることから、刀子と考えられる。

3. 3号土坑墓

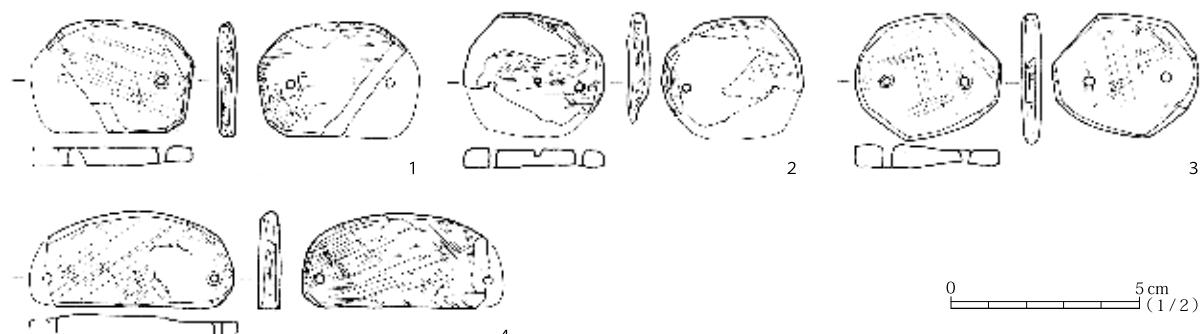
3号土坑墓は、2号土坑墓とは2mの間隔を挟んで南西方向に位置する。南側は調査区外へ伸びている。長



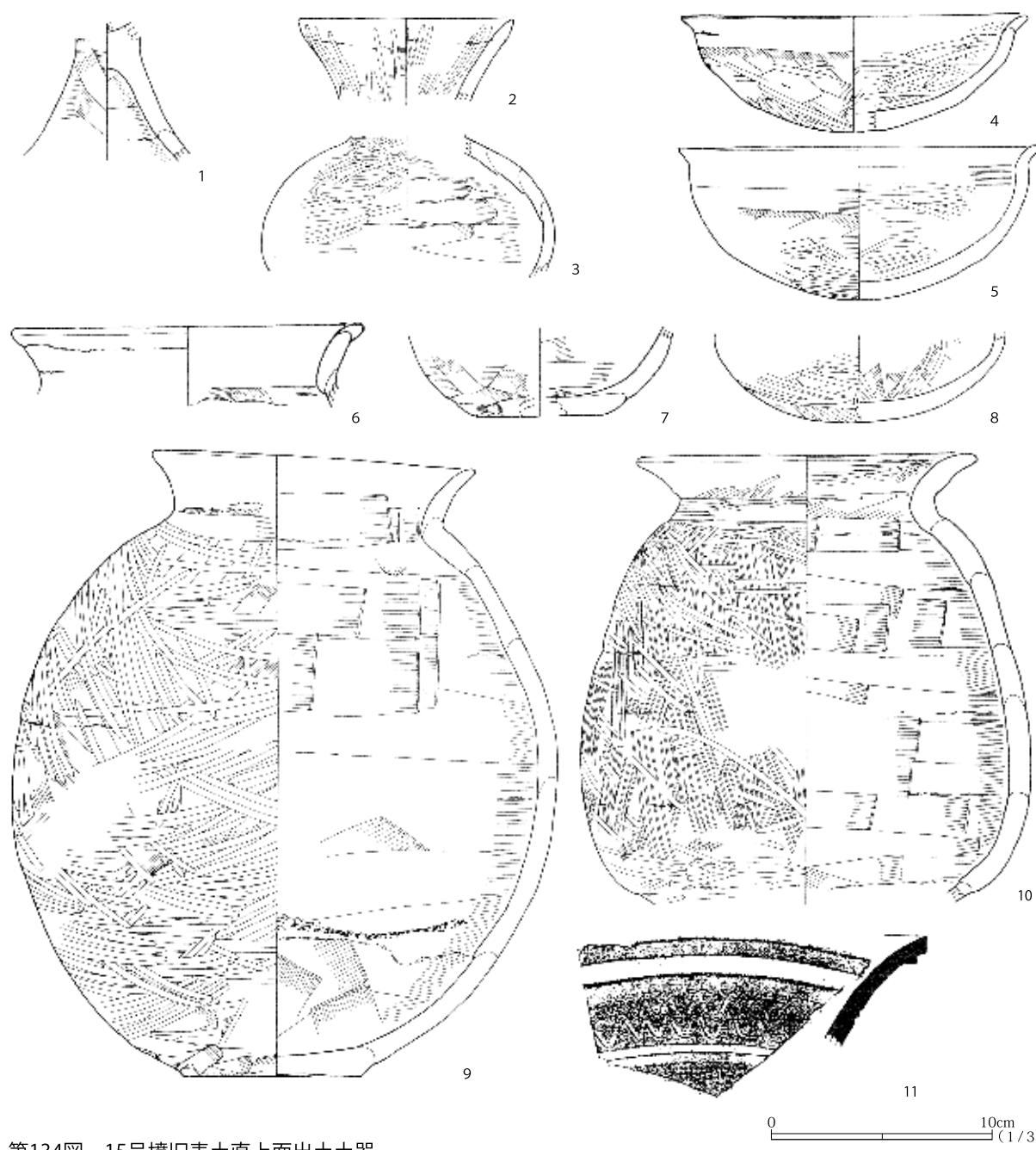
第131図 15号墳周溝出土石製模造品



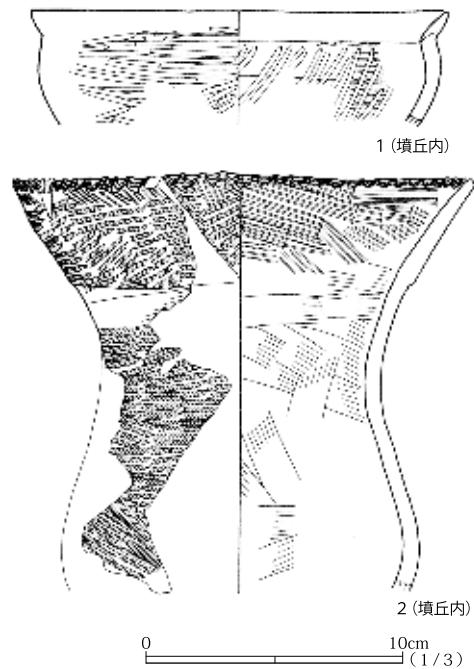
第132図 15号墳周溝出土土器



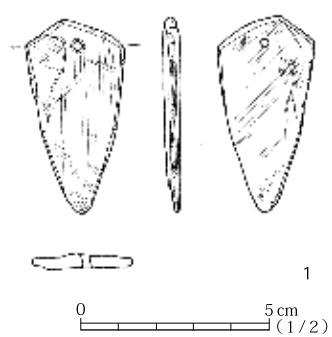
第133図 15号墳旧表土直上面出土石製模造品



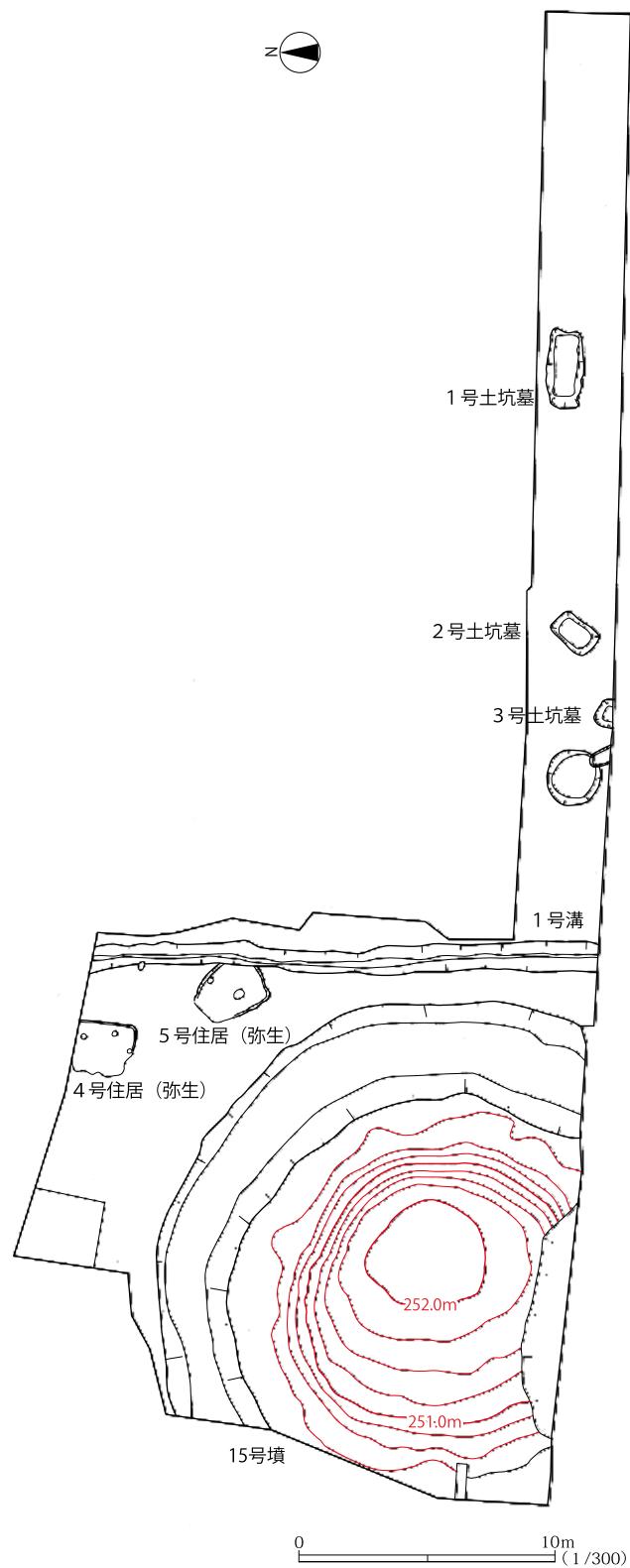
第134図 15号墳旧表土直上面出土土器



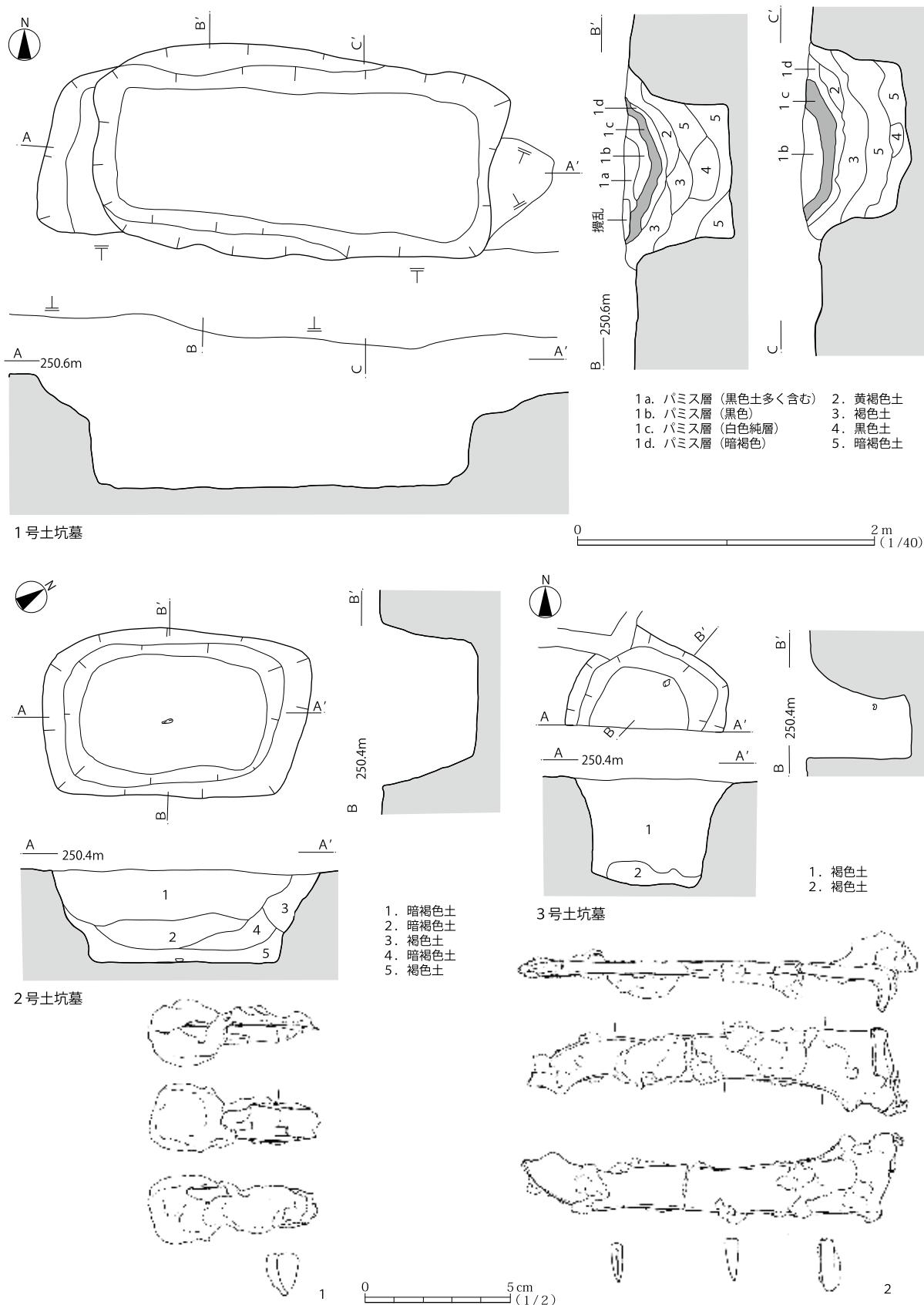
第135図 15号墳填丘内出土土器



第136図 1号溝出土石製模造品



第137図 15号墳および周辺遺構全体図



第138図 15号墳土坑墓平面図・断面図・出土鉄製品

軸は残存 60 cm、短軸は 105 cm を測る。深さは確認面より 72cm を測る。壁は、底面より直立ぎみに立ち上がり、上端にいくにしたがって緩やかに開く。底面直上より、曲刃鎌が 1 点出土している。全長 12.8cm・中央部幅 1.5cm・断面形は二等辺三角形状を呈している。基部に近づくにしたがい幅広となり、基部が 1.0cm ほど折り曲げられている。

(7) 正直9号墳

1. 過去の記載

9号墳に関する資料は少ないものの、『福島県史』及び『郡山市史』に掲載されており、その調査所見を紐解いてみる。

『福島県史』では「9号墳は石室なく内部から石製模造品（斧）を出土し、近くの破壊された小円墳のふた石の断片は寄棟造りのようである」とある。また、『福島県史』526 図には、「内部構造は確認されず当資料のみ発見された」と記載されている。

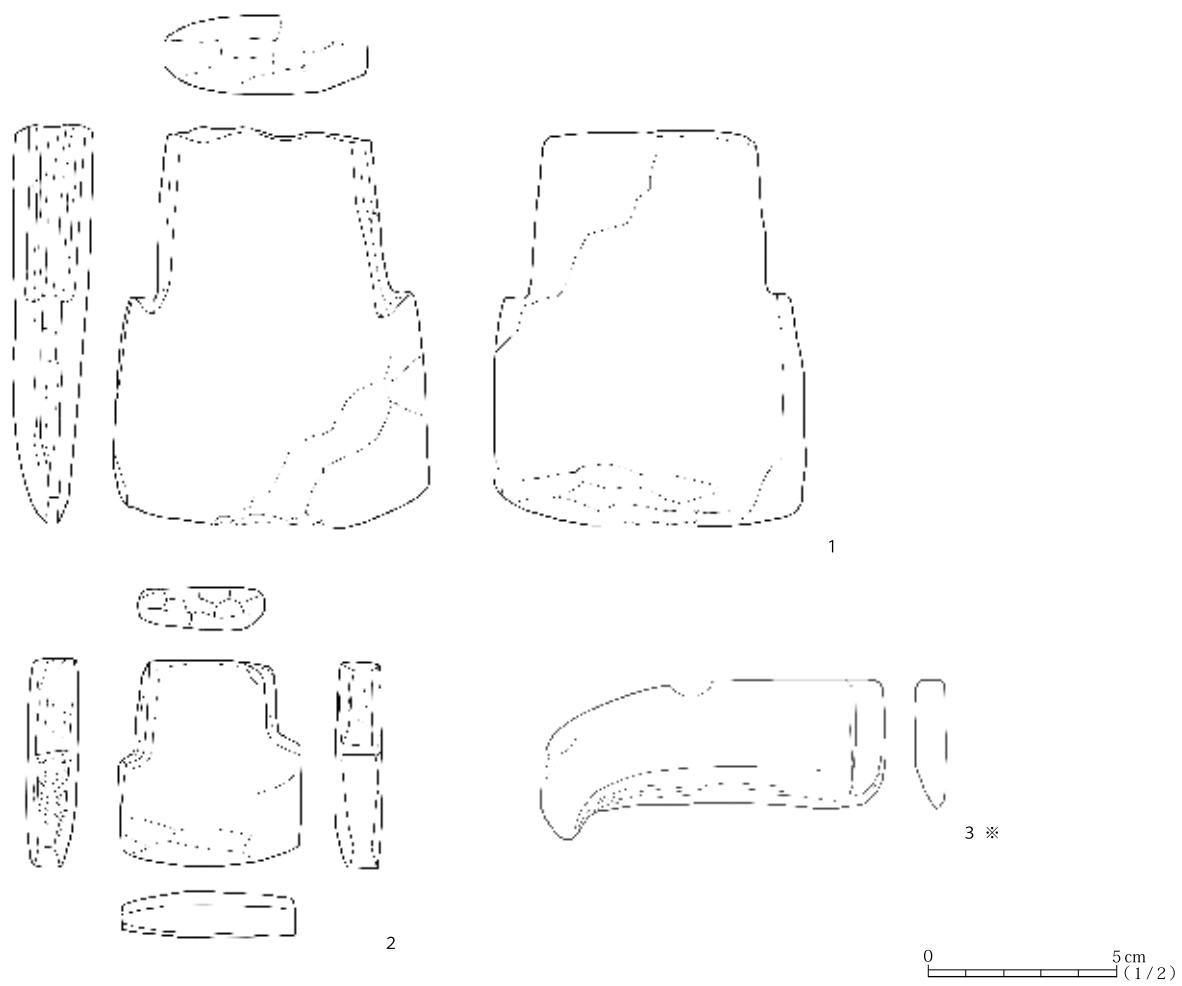
『郡山市史』では「県道南にある 9号墳は石室がなく、石製模造品（斧・鎌）を出土し、近くの破壊された小円墳の石棺のふた石は寄棟造りである」とされる。

墳丘が削平された現在、9号墳を知るためにこうした記述に頼る他なく、遺物は埋葬施設から出土した可能性が高い。「石室なく」との表現から、箱式石棺などではない竪穴系埋葬施設（木棺直葬など）であったと考えられる。

2. 石製模造品（第 139 図、図版 61）

9号墳から出土した石製模造品のうち、斧形石製模造品は現在、福島県立博物館に所蔵されている。資料には出土地などの情報は残されておらず、収蔵された経緯などの不明である。しかし、『福島県史』に掲載された 526 図の実測図と完全に一致することから、この資料が 9号墳出土であることは疑い得ない。なお、同 526 図には鎌形石製模造品も掲載されているが、鎌形は福島県立博物館に所蔵されておらず、現在、所在は不明である。

第 139 図 1 の斧形石製模造品は、長さ 10.3 cm・幅 8.2 cm・厚さ 1.9 cm を測る。側面は鉄製工具によりケズリの痕が明瞭に残る。2 は長さ 5.4 cm・幅 4.8 cm・1.2 cm を測る。袋部側面は鉄製工具によるケズリ痕が、刃先部側面には擦痕が観察される。



第139図 9号墳出土石製模造品

第9節 分布調査

1. 分布調査（第140図）

正直古墳群と同じ範囲にある正直B遺跡では、圃場整備事業に伴う母畠地区遺跡分布調査が行われている。このうち、最も多くの古墳が密集する古墳群の南西部部分では、前述したように1983（昭和58）年に調査が実施された。その際、支群G・Hの範囲が調査され、新発見の古墳も含め、古墳の周溝が確認されている。トレンチ調査では堅穴建物が32棟検出されている。そのうちの2棟が古墳時代前期と後期の堅穴建物であるものの、他は全て奈良・平安時代の堅穴建物で、正直古墳群と同時期の堅穴建物は検出されていない。

一方、1984（昭和59）年の第2次試掘調査では、遺跡の北端部約20,000m²を対象として実施された（第140図）。調査は、最大1.5×10mのトレンチで、畑の作付け状況に応じて規模を増減させ、53本のトレンチが設定された。

調査が行われたうちの南西部部分、支群Eの東側に位置する場所では、第1～8トレンチの8本のトレンチが設定された。そのうち第5～7トレンチの3か所のトレンチで堅穴建物を検出した。その20m北東側では第9～15トレンチの7か所のトレンチを設定した。そのうち第12～14トレンチの3か所のトレンチで堅穴建物を検出した。その北東20mの位置で設定した第16トレンチでも堅穴建物を確認している。北東端の130×100mの範囲で、第17～53トレンチの計37本のトレンチを設定した。そのうち第17・18・20・24～29・31・33・34・36～38・40・41・47～51トレンチの22本のトレンチで堅穴建物を検出している。

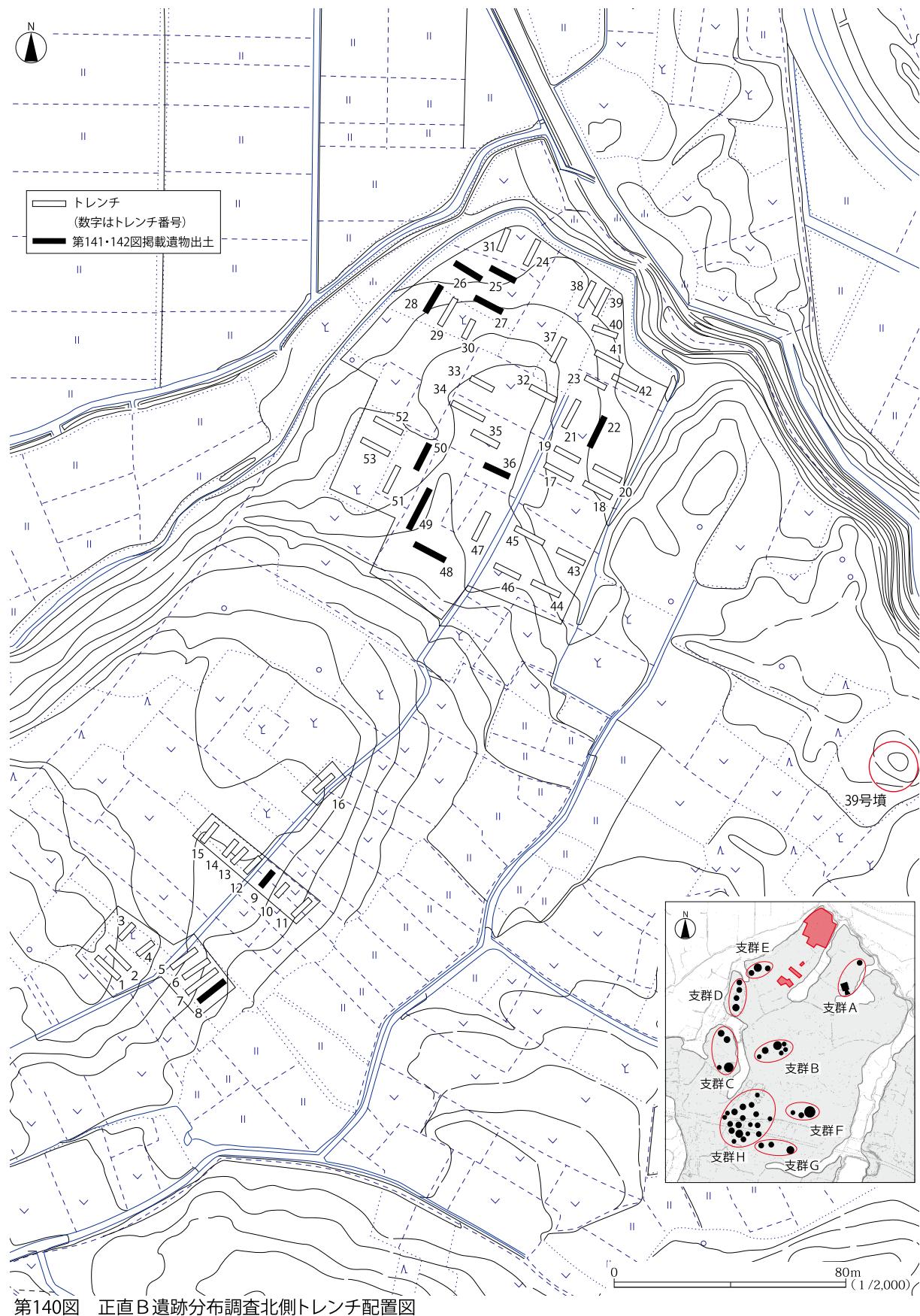
1か所のトレンチから複数の堅穴建物が検出されるなど、遺構は密集しており、堅穴建物44棟・土坑43基・溝17条が検出された。出土遺物の大半を占めるのが5世紀の土器で、調査区全般から出土している。

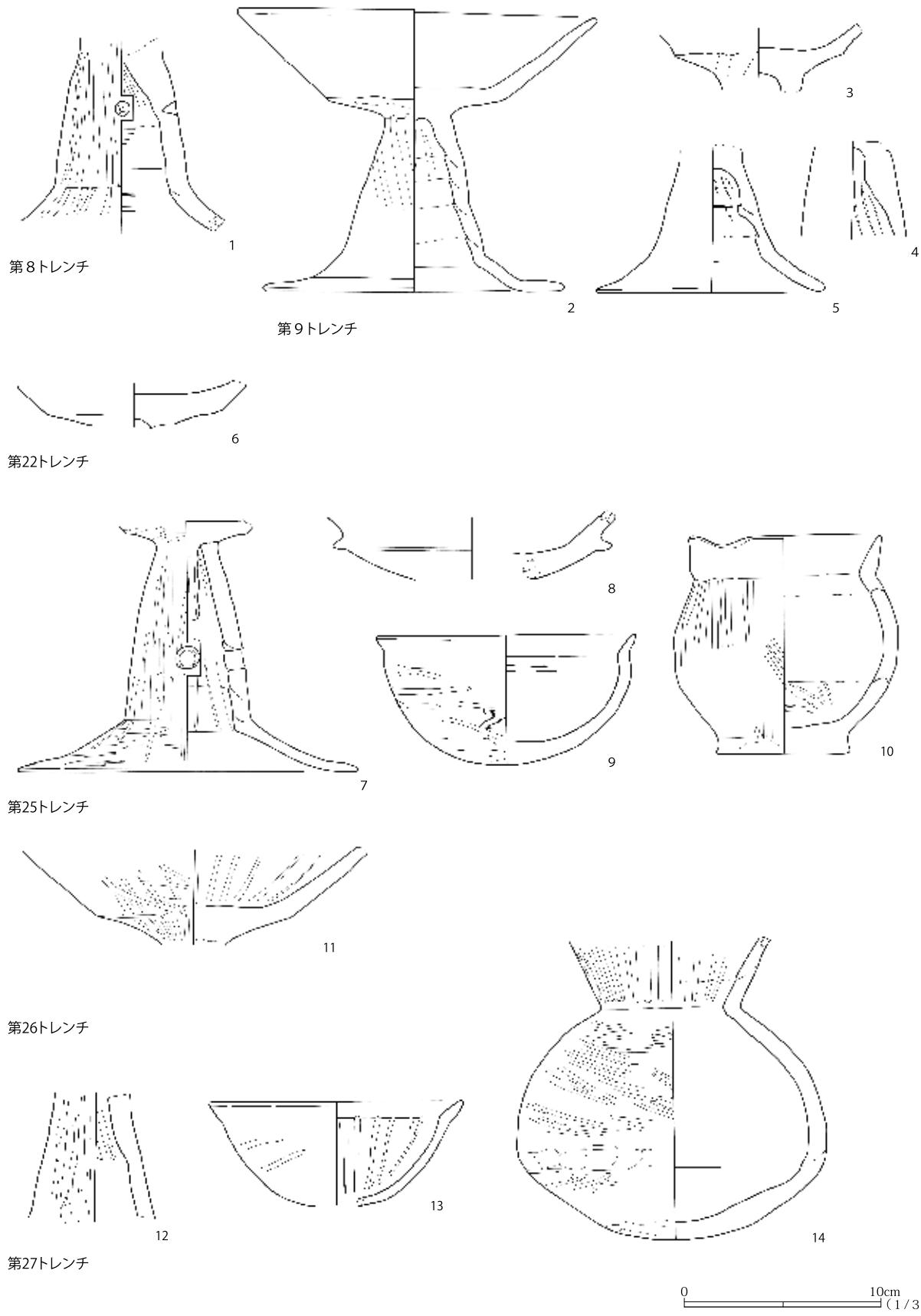
2. 出土遺物（第141～143図、図版62）

出土遺物のうち、分布調査報告書に掲載されているものは、一部改変し転載した。未掲載の遺物については図化を行い掲載している。

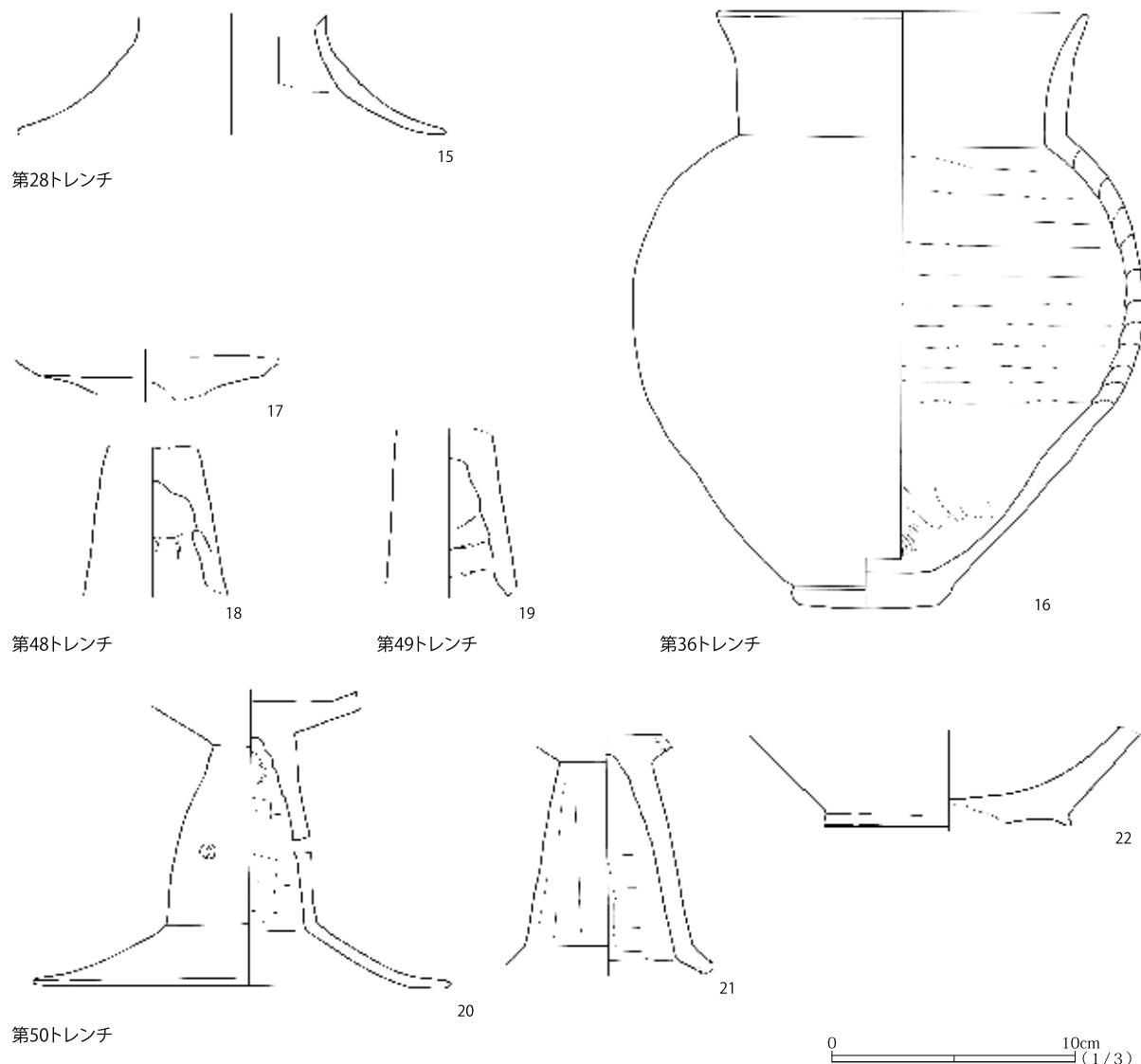
第8トレンチからは、脚部に未貫通の穿孔が施される高壺（第141図1）が出土した。第9・22トレンチからも高壺が出土している。このうち2は器高14.8cmを測る。第25トレンチでは穿孔された高壺脚部、壺部下端が外方へ突出する8の高壺、9の椀壺や10の鉢が見られる。第26トレンチでは11の高壺壺部が、第27トレンチでは、12の高壺脚部、13の椀壺、14の体部下寄りに最大径がある中型壺が出土した。第142図15は第28トレンチから出土した高壺裾部で、第36トレンチからは16の口縁部が直立に立ち上がる甕が出土している。第48～50トレンチからも17～22の高壺が出土している。いずれも中空の屈折脚高壺で、20は脚部中央に穿孔がある。22は壺部下端が下方へ突出するものである。

分布調査範囲からは、剣形石製模造品が3点出土している（第143図1～3）。いずれもトレンチからの出土ではなく、表面採集資料である。下半部は欠損し表面にキズが残るのは耕作に起因するものと思われる。平面形態はいずれも台形の基部を呈している。1は両面に鎧が形成され、比較的大型のものである。2・3は片面に鎧が見られる。

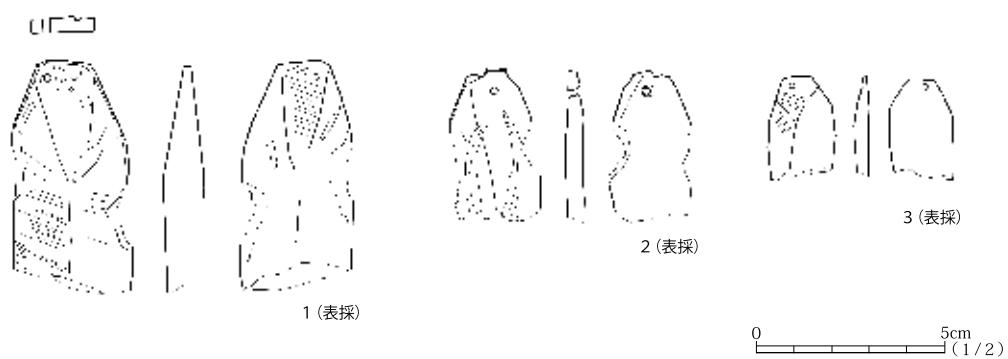




第141図 分布調査北側トレンチ出土土器(1)



第142図 分布調査北側トレンチ出土土器(2)



第143図 分布調査北側出土石製模造品

表4 正直古墳群出土石製模造品一覧（1）

27号墳 南箱式石棺 斧形

遺物番号	付着物		計測値					
	白色	鉄分	長さ	刃部幅	肩部幅	袋部長	袋部幅	厚さ
第37図1			6.15	5.0	4.8	2.3	3.7	1.75

27号墳 南箱式石棺 刀子形

遺物番号	付着物		計測値					
	白色	鉄分	全長	鞘部長	把部長	最大幅	鞘部厚	把部厚
第37図2			5.8	4.7	1.1	2.2	0.55	0.45
3			残5.9		1.3	2.0	0.55	0.5
4			5.7	4.4	1.3	2.3	0.5	0.45
5			5.4	4.1	1.3	2.25	0.6	0.45
6			4.9	3.7	1.2	1.95	0.55	0.4
7			4.5	3.5	1.0	1.95	0.45	0.4

27号墳 南箱式石棺 剣形

遺物番号	付着物		計測値		
	白色	鉄分	長さ	幅	厚さ
第38図8	○		7.0	2.65	0.75
9	○		6.85	2.95	0.85
10	○		6.65	2.55	0.8
11	○		6.55	2.6	0.7
12	○		5.95	3.0	0.7
13	○		5.5	2.5	残0.5
14	○		5.35	2.15	0.65
15	○		5.1	2.6	0.85
16	○		5.15	2.15	0.75
17	○		4.85	2.45	0.8
18	○		5.55	2.0	0.6
19	○		5.15	2.25	0.65
20	○		4.3	1.7	0.55
21	○		3.85	1.5	0.6
第39図22			5.85	1.55	0.4
23			残4.8	1.2	0.3
24			3.95	1.6	0.4
25			3.85	1.5	0.3
26			3.55	1.45	0.25

27号墳 北箱式石棺東側埋葬施設 剣形

遺物番号	付着物		計測値		
	白色	鉄分	長さ	幅	厚さ
第44図1	○		5.75	2.7	0.8
2	○		5.45	2.45	0.55
3	○		5.25	2.05	残0.5
4	○		5.0	1.75	0.5
5	○		4.2	1.65	0.45
6	○		残3.6	1.6	0.5
7			4.2	1.7	0.55
8			4.05	1.55	0.55
9			3.3	1.7	0.5
10			3.3	1.55	0.45
11			残4.6	1.7	0.5
12			4.25	1.8	0.35
13			5.3	1.75	0.45
14			3.8	1.45	0.4
15			4.05	1.75	0.4
16			3.3	1.7	0.35
17	○		3.35	1.3	0.3
18			残2.6	1.2	0.3
第45図19			残3.8	1.5	0.4
20			残3.4	1.4	0.35
21			残2	1.55	0.35
22			3.3	1.1	0.3
23	○		2.7	1.1	0.2

27号墳 南箱式石棺 有孔円板

遺物番号	付着物		計測値			
	白色	鉄分	幅	長	厚さ	穿孔幅
第39図27			2.6	2.5	0.3	
28			2.6	2.5	0.3	
29			2.45	2.4	0.3	
30			2.5	2.5	0.3	
31			2.3	残1.9	0.25	
32			2.1	残1.9	0.3	
33			2.1	1.95	0.3	
34			2.2	2.2	0.3	
35			2.4	残2.1	0.3	
36			2.1	1.8	0.3	
37			1.85	1.7	0.2	
38			1.85	残1.7	0.2	
39			1.7	残1.7	0.25	
40			1.9	残1.4	0.25	
41			1.5	1.3	0.25	
42			1.3	1.2	0.25	
43	○		2.3	2.3	0.3	
44			1.75	1.6	0.25	
45			2.9	3.1	0.35	1.25
46			2.35	2.3	0.3	0.85
47			2.2	2.2	0.3	0.75
48			2.2	2.05	0.3	0.75
49			1.8	1.6	0.2	0.75
50			1.55	1.5	0.2	0.6

27号墳 北箱式石棺東側埋葬施設 有孔円板

遺物番号	付着物		計測値			
	白色	鉄分	幅	長	厚さ	穿孔幅
第45図24	○		4.2	4.2	0.45	2.2
25			3.7	3.6	0.5	1.95
26	○		3.4	3.3	0.4	1.65
27			3.05	2.95	0.4	1.5
28	○		2.65	2.6	0.35	1.25
29	○		2.6	2.6	0.35	1.1
30	○		2.4	2.2	0.35	0.85
31	○		2.1	1.9	0.35	1.0
32	○		2.0	2.25	0.45	0.8
33	○		2.5	2.35	0.3	1.1
34	○		2.1	2.05	0.35	1.05
35	○		2.1	2.1	0.4	0.7
36	○		1.85	1.85	0.45	0.5
37			2.35	2.35	0.35	1.0

23号墳 刀子形

遺物番号	付着物		計測値					
	白色	鉄分	全長	鞘部長	把部長	最大幅	鞘部厚	把部厚
第75図1			7.6	6.1	1.4	2.99	0.75	
2			8.7	7.1	1.55	2.7	0.9	
3			6.4	5.6	0.75	2.3	0.95	
4			6.15	5.1	1.05	2.2	0.5	
5			5.85	4.5	1.3	2.4	0.55	
6			5.2	4.0	1.15	2.3	0.55	

単位cm

表5 正直古墳群出土石製模造品一覧（2）

27号墳 北箱式石棺西側埋葬施設 剣形

遺物番号	付着物		計測値		
	白色	鉄分	長さ	幅	厚さ
第55図1	○		5.95	2.6	0.8
2	○		4.2	2.25	0.65
3	○		4.1	2.4	0.75
4	○		4.05	2.1	0.55
5	○		4.05	2.3	0.55
6	○		3.35	2.0	0.55
7	○		3.8	1.85	0.5
8	○		3.6	2.2	0.6
9	○		3.8	2.0	0.45
10	○	○	3.2	1.8	0.5
11	○		3.65	1.9	0.55
12	○	○	残3.05	1.85	0.5
13	○		2.9	1.7	0.55
14	○		3.15	1.7	0.5
15	○		3.45	1.75	0.4
16	○		3.3	1.6	0.5
17	○		3.1	1.55	残0.45
18			3.75	1.95	0.4

27号墳 北箱式石棺西側埋葬施設 有孔円板

遺物番号	付着物		計測値		
	白色	鉄分	幅	長	厚さ
第56図19				2.7	2.45
20				1.9	1.9
21				1.95	1.9
22				2.1	1.95
23	○	○		2.6	2.6
24		○		2.5	2.7
25		○		2.1	1.95
26	○	○		2.05	1.95
27	○			2.15	2.2
				0.25	0.85

30号墳 周溝 剣形

遺物番号	付着物		計測値		
	白色	鉄分	長さ	幅	厚さ
第81図1				4.0	2.6
2				3.7	2.5
				0.5	

30号墳 第1埋葬施設 刀子形

遺物番号	付着物		計測値				
	白色	鉄分	全長	鞘部長	把部長	最大幅	鞘部厚
第83図1				7.8	6.1	1.7	2.0
2				7.6	5.6	2.0	2.0
3				7.4	6.0	1.4	2.0
4				残6.6		1.4	2.0
						0.8	

30号墳 第1埋葬施設 有孔円板

遺物番号	付着物		計測値			
	白色	鉄分	幅	長	厚さ	穿孔幅
第83図6				2.5	2.2	0.55
7				2.3	2.2	0.35
8				残2.1	2.3	0.55
9				残1.7	残2.5	0.4

30号墳 墳丘外埋葬施設 剣形

遺物番号	付着物		計測値		
	白色	鉄分	長さ	幅	厚さ
第91図1				6.6	3.3
2				5.0	2.2
3				4.15	2.3
				0.9	
				0.65	
				0.8	

13号墳 剣形

遺物番号	付着物		計測値		
	白色	鉄分	長さ	幅	厚さ
第128図1			残4.2	3.3	0.4

13号墳 勾玉

遺物番号	付着物		計測値		
	白色	鉄分	長さ	幅	厚さ
第128図4			残4.5		0.4

15号墳 旧表土上面 有孔円板

遺物番号	付着物		計測値			
	白色	鉄分	幅	長	厚さ	穿孔幅
第133図1			残3.9	2.9	0.45	
2			3.8	残3.3	0.5	2.35
3			3.9	3.2	0.6	2.1
4			残4.9	2.4	0.6	4.5

9号墳 斧形

遺物番号	付着物		計測値				
	白色	鉄分	長さ	刃部幅	肩部幅	袋部長	袋部幅
第139図1			10.3	8.2	6.4	4.5	5.7
2			5.4	4.8	4.0	2.2	3.8
						1.2	

15号墳 周溝内 有孔円板

遺物番号	付着物		計測値			
	白色	鉄分	幅	長	厚さ	穿孔幅
第131図1				残2.3	3.9	0.6
2				2.7	2.45	0.5
3				残2.2	残1.1	残0.2
4				残2.9	残2.2	残0.3

15号墳(1号溝) 剣形

遺物番号	付着物		計測値		
	乳白色	鉄分	長さ	幅	厚さ
第136図1				5.1	2.6
				0.35	

単位cm